

# 広島県文化財調査報告

第 14 集

1983

広島県教育委員会

## 序 文

わが国では、昭和30年代後半からの急激な経済成長政策とそれに伴う各種開発事業の増大などから、人口の過度な都市集中化がすすみ、新しい町づくりがすすむなかで多くの解決すべき問題が山積することが指摘されてきました。

本県でも広島・福山両市を中心として人口の都市集中がすすみ、これに対応して公共施設の確保をはじめ各種の施設なども供給の必要性が増大してきました。その中で、県立学校の適正な配置も緊急な課題として計画的な対応をせまられているところであります。

さて、これらの状況の中で県教委は、今から10年前、安芸郡安芸町（現広島市）と佐伯郡五日市町に建設を予定し昭和49年開校いたしました安芸高等学校と五日市高等学校につきましては用地内に遺跡が含まれていることから多くの対応がなされました。すなわち、学校建設と埋蔵文化財保護との調整について、度重なる検討や努力がつけられたのであります。しかし、いずれも用地等の問題から計画変更が困難なため、事前の発掘調査に踏み切ったのであります。ところが、調査の進む中で安芸高校予定地内の豊谷遺跡は、当時としては県内初の弥生時代集落跡が良好に残っていたことから、学術的にも極めて貴重な遺跡であることがわかり、調査途中で一部設計変更を行って現状保存し、広島県史跡に指定いたしました。しかし、その後調査報告は現在まで未刊のままであり、その刊行が多くの人々から永らく要望されていたものであります。

このたび、このように報告書を完成し、県教育委員会としてもやっとその責任を果すことができました。しかし、この10年の間に埋蔵文化財に係る状況も大きく変化しております。そのため今日では学術的にもの足りないところもあると思われますが、発掘調査の貴重な記録として御活用いただければ幸いです。

昭和58年3月

広島県教育委員会教育長

田 所 諭

## 凡　　例

1. 本報告は県立学校建設に伴い事前の発掘調査を実施した畠谷遺跡と倉重古墳の発掘調査報告である。

畠谷遺跡は県立安芸高等学校（広島市東区安芸町）建設に伴い昭和48年に、倉重古墳は県立五日市高等学校（佐伯郡五日市町）建設に伴い昭和47年に広島県教育委員会が発掘調査を実施した。

2. 本報告書の執筆は、畠谷遺跡：鳴田滋、倉重古墳：桑原隆博が行い、小都隆が総括した。

3. 出土遺物の整理・復元・実測・図面の整図等は鳴田・桑原が中心となって行った。

4. 出土遺物の写真は鳴田が撮影した。

5. 本報告に使用した略号は下記のとおりである。

SB：住居跡、SK：土壤、SP：土器棺、SX：その他の遺構、KF：古墳  
土器断面　白ヌキ：弥生土器・土師器、黒塗り：須恵器

6. 本報告に使用した地形図は建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図（海田市・広島）の一部を複製したものである。

# 広島県文化財調査報告 第14集

## 目 次

### 序 文

I	はじめに	(1)
II	調査の遺跡	(3)
1.	畠谷遺跡	(3)
2.	倉重古墳	(53)

## 図版目次

- 図版 1-1 a 疊谷遺跡遠景（西より）  
b 同 上（東より）
- 図版 1-2 a 疊谷遺跡SB1検出状態（西より）  
b 疊谷遺跡SB1土器出土状態
- 図版 1-3 a 疊谷遺跡SB1完掘後（東より）  
b 疊谷遺跡SB2完掘後（南より）
- 図版 1-4 a 疊谷遺跡SB3完掘後（東より）  
b 同 上（北より）
- 図版 1-5 a 疊谷遺跡SB4完掘後（東より）  
b 同 上（南より）
- 図版 1-6 a 疊谷遺跡SP38検出状態  
b 疊谷遺跡SX16完掘後（東より）
- 図版 1-7 a 疊谷遺跡SK19（南より）  
b 疊谷遺跡SK21（北より）
- 図版 1-8 a 疊谷遺跡SB8検出状態（東より）  
b 疊谷遺跡SB5・6（東より）
- 図版 1-9 a 疊谷遺跡SB6（南より）  
b 疊谷遺跡SK28（西より）
- 図版 1-10 a 疊谷遺跡SB5土器出土状態  
b 疊谷遺跡SK30（南より）
- 図版 1-11 a 疊谷遺跡SK33（西より）  
b 同 上 完掘後（西より）
- 図版 1-12 a 疊谷遺跡SB9～13完掘後（西より）  
b 同 上（東より）
- 図版 1-13 a 疊谷遺跡SB9～13（南より）  
b 疊谷遺跡SB10（南より）

- 図版 1-14 a 疊谷遺跡 S B 14 土層（南より）  
b 疊谷遺跡 S B 14 完掘後（北より）
- 図版 1-15 a 疊谷遺跡 S B 15 完掘後（南より）  
b 疊谷遺跡 C 地点貝塚（北より）
- 図版 1-16 疊谷遺跡出土土器（1）
- 図版 1-17 疊谷遺跡出土土器（2）
- 図版 1-18 疊谷遺跡出土土器（3）
- 図版 1-19 疊谷遺跡出土土器（4）
- 図版 1-20 疊谷遺跡出土土器（5）
- 図版 1-21 疊谷遺跡出土土器、土製勾玉、管玉、鉄器
- 図版 2-1 a 倉重古墳遠景（北西より）  
b 倉重古墳横穴式石室全景（南東より）
- 図版 2-2 a 倉重古墳横穴式石室遺物出土状態（西より）  
b 倉重古墳横穴式石室全景（東より）
- 図版 2-3 a 倉重古墳横穴式石室北側壁構築状態  
b 倉重古墳横穴式石室敷石除去後
- 図版 2-4 倉重古墳出土遺物

## 挿図目次

第1-1図	疊谷遺跡周辺遺跡分布図 (1:50,000) .....	(5)
第1-2図	疊谷遺跡周辺地形図 (1:1,500) .....	(6)
第1-3図	疊谷遺跡遺構配置図 (1:1,000) .....	(7)
第1-4図	疊谷遺跡A地点遺構配置図 (1:300) .....	(9)
第1-5図	疊谷遺跡SB1出土土器実測図 (1:60) .....	(10)
第1-6図	疊谷遺跡SB1出土土器実測図 (1)(1:3) .....	(12)
第1-7図	疊谷遺跡SB1出土土器実測図 (2)(1:3) .....	(13)
第1-8図	疊谷遺跡SB1出土土器実測図 (3)(1:3) .....	(14)
第1-9図	疊谷遺跡SB2出土土器実測図 (1:60) .....	(15)
第1-10図	疊谷遺跡SB2出土土器実測図 (1:3) .....	(16)
第1-11図	疊谷遺跡SB3出土土器実測図 (1:60) .....	(17)
第1-12図	疊谷遺跡SB3下層出土土器実測図 (1:3) .....	(18)
第1-13図	疊谷遺跡SB3上層出土土器実測図 (1:3) .....	(19)
第1-14図	疊谷遺跡SB4出土土器実測図 (1:60) .....	(20)
第1-15図	疊谷遺跡SX16出土土器実測図 (1:60) .....	(22)
第1-16図	疊谷遺跡SX16出土土器実測図 (1:3) .....	(23)
第1-17図	疊谷遺跡SP38出土土器実測図 (1:20) .....	(24)
第1-18図	疊谷遺跡SP38出土土器実測図 (1:3) .....	(24)
第1-19図	疊谷遺跡SK21出土土器実測図 (1:40) .....	(25)
第1-20図	疊谷遺跡B地点遺構配置図 (1:300) .....	(26)
第1-21図	疊谷遺跡SB5・6実測図 (1:60) .....	(27)
第1-22図	疊谷遺跡SK28~30土層断面図 (1:60) .....	(28)
第1-23図	疊谷遺跡SB5出土土器実測図 (1:3) .....	(29)
第1-24図	疊谷遺跡SB6出土土器実測図 (1:3) .....	(30)
第1-25図	疊谷遺跡SK28出土土器実測図 (1:3) .....	(30)
第1-26図	疊谷遺跡SB5出土鉄器・SK30出土土製勾玉実測図 (1:2) .....	(31)

第 1-27 図	疊谷遺跡 S B 8 出土土器実測図 (1 : 3) .....	(32)
第 1-28 図	疊谷遺跡 S K 32 出土土器実測図 (1 : 3) .....	(32)
第 1-29 図	疊谷遺跡 S K 32・33 実測図 (1 : 40) .....	(33)
第 1-30 図	疊谷遺跡 B 地点出土土器実測図 (1 : 3) .....	(34)
第 1-31 図	疊谷遺跡 B 地点貝塚出土土器実測図 (1 : 3) .....	(35)
第 1-32 図	疊谷遺跡 C 地点造構配置図 (1 : 300) .....	(36)
第 1-33 図	疊谷遺跡 S B 9~13 実測図 (1 : 60) .....	(折込)
第 1-34 図	疊谷遺跡 S B 9~13 の新旧関係図 (1 : 150) .....	(38)
第 1-35 図	疊谷遺跡 S B 9~13 出土土器実測図 (1 : 3) .....	(39)
第 1-36 図	疊谷遺跡 S B 14・15 実測図 (1 : 60) .....	(40)
第 1-37 図	疊谷遺跡 C 地点貝塚出土土器実測図 (1) (1 : 3) .....	(43)
第 1-38 図	疊谷遺跡 C 地点貝塚出土土器実測図 (2) (1 : 3) .....	(44)
第 1-39 図	広島湾岸地域の弥生~古墳時代の貝塚・集落遺跡分布図 .....	(45)
第 1-40 図	疊谷遺跡出土土器編年表 (1 : 9) .....	(48, 49)
第 1-41 図	疊谷遺跡集落構成の変化 (1 : 2,500) .....	(52)
第 2-1 図	五日市町周辺古墳分布図 (1 : 50,000) .....	(55)
第 2-2 図	倉重古墳周辺地形図 (1 : 1,500) .....	(56)
第 2-3 図	倉重古墳調査区及び造構配置図 (1 : 200) .....	(57)
第 2-4 図	倉重古墳墳丘断面図 (1 : 100) .....	(58)
第 2-5 図	倉重古墳横穴式石室実測図 (1 : 40) .....	(60)
第 2-6 図	倉重古墳出土土器実測図 (1 : 3) .....	(61)

## I はじめに

広島市周辺の人口集中に伴い広島県教育委員会（以下県教委）は、年次的に県立学校の建設・整備をすすめている。

昭和47年、その計画の一環として新設校を広島市東部の安芸町に予定したところ、建設用地内に弥生時代の貝塚（豊谷遺跡）が存在することが明らかになった。このため、県教委は学校建設と文化財保護との調整に努力したが、当該地域では他に用地が求められないことや、諸般の事情からの当初の計画どおりの地域に学校建設をすすめることとした。このため当該地内の豊谷遺跡については、昭和48年3月12日から6月1日にかけて事前の発掘調査を実施した。

ところで、この調査では当初の予想に反して、弥生時代から古墳時代にかけての大集落跡が埋蔵されていることが明らかとなった。当時、県内においてかかる大規模な集落遺跡の調査例はなく、その内容の重要さに鑑み調査を継続しながらその保存対策をも検討した。その結果、掘削予定の尾根の一部を現状で残し、校舎を高層化するなど設計変更を行い、集落跡の一部については現状維持し、あわせて広島県史跡に指定した。さらに当該地については保存と公開をはかるため環境整備事業を実施し標識、説明板、芝張りなどを行っている。

一方、これに先だち広島市の西に接する五日市町も、広島市のベッドタウンとして現在は人口9万人を擁する日本一のマンモス町に成長しているが、先の安芸町における例と同様、県立学校新設の必要性から、昭和47年秋、建設を計画した用地内で発見された倉重古墳の発掘調査を実施した。

この報告は、諸般の事情から約10年を経過して、このたびようやく発刊のはこびとなったものである。

なお、発掘調査は当時の県教委文化財保護室指導主事の次の職員があたった。

豊谷遺跡　是光吉基、山県元、脇坂光彦、中田昭、鹿見啓太郎、吉本裕子

木村妙子

倉重古墳　松村昌彦、是光吉基、鹿見啓太郎、篠原芳秀

## II 調査の遺跡

### 畠谷遺跡

(1) 位置と環境

(2) 調査の概要

(3) 遺構と遺物

1 A 地点

2 B 地点

3 C 地点

(4) まとめ

## (1) 位置と環境

豊谷遺跡は、広島市東区安芸町温品字豊谷の温品川東岸の呉婆々字山西麓尾根上に位置する。遺跡の立地する尾根線上の平坦面は、標高約100~110m、温品川からの比高約50~60mにあり、南方に広島湾を見わたすことができる。

呉婆々字山と二ヶ城山に挟まれたこの地域は、馬木を分水嶺として北の福田・小河原地区と、南の温品地区の2つに分けられる。周辺では広い沖積地面は持たないものの、古来より重要な遺跡が分布している事が知られており、特に福田の木ノ宗山遺跡では明治24年に中腹の大石の下から銅鐸・銅剣・銅戈が一括して出土し、学史に名高い<sup>(1)</sup>。

南の温品地区周辺は弥生時代には海岸線が湾入していたため貝塚が多く発見されている。周辺では豊谷遺跡より高位にある豊谷鉄塔上貝塚、岩谷観音貝塚をはじめ、温品川西岸の安芸小学校貝塚、大原貝塚、低位にある森垣内貝塚など、弥生時代の土器を包含する貝塚がある。また中山地区東谷の中山貝塚は、日本の農耕文化の生成をさぐる上で極めて貴重な遺跡として著名である。<sup>(2)</sup>

古墳時代の温品では、彷製鏡2面、直刀2、銅剣1や勾玉、切小玉等多数を出土した須賀谷古墳があり<sup>(3)</sup>、府中町下岡田遺跡では官衙関係の遺構と共に古墳時代後期の住居跡も検出されている。<sup>(4)</sup>

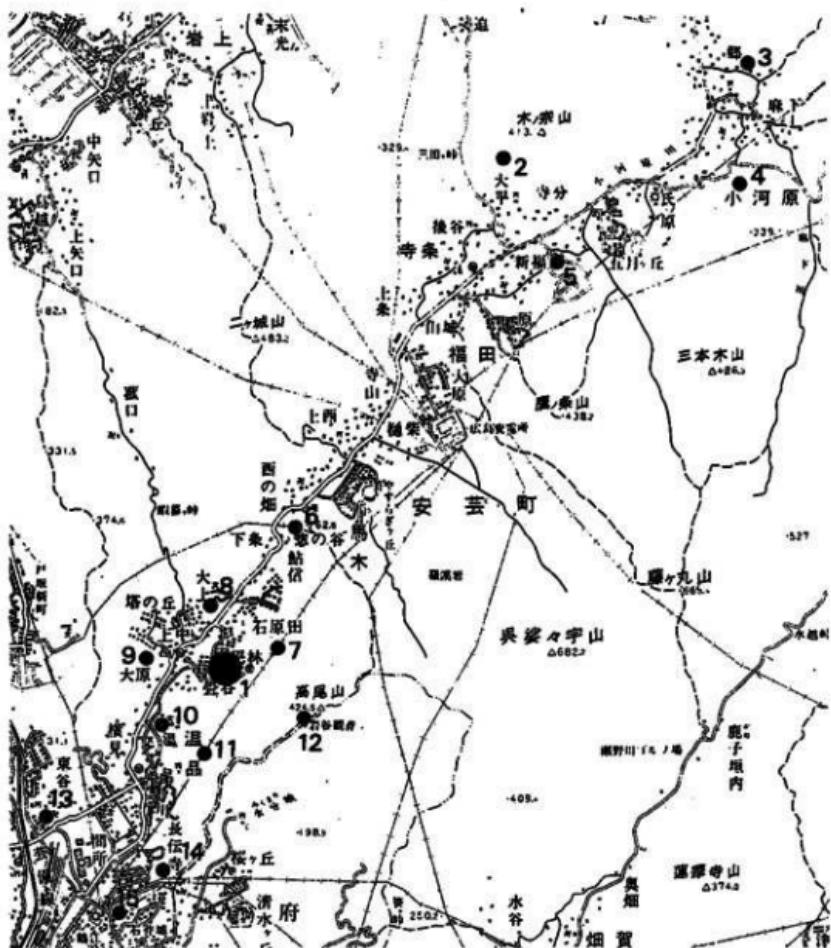
### 注

(1) 森本六爾「安芸福田遺跡調査予報」『人類学雑誌』44-4 1929年

(2) 松崎寿和、潮見浩「広島県中山遺跡」「日本農耕文化の生成」1961年

(3) 本村豪章「広島県安芸町温品須賀谷古墳調査報告」「芸備地方史研究」34、1960年

(4) 昭和57年度に府中町が実施の調査で、古墳時代後期の方形住居跡が検出されている。



第1-1図 豊谷遺跡周辺遺跡分布図（弥生・古墳時代）

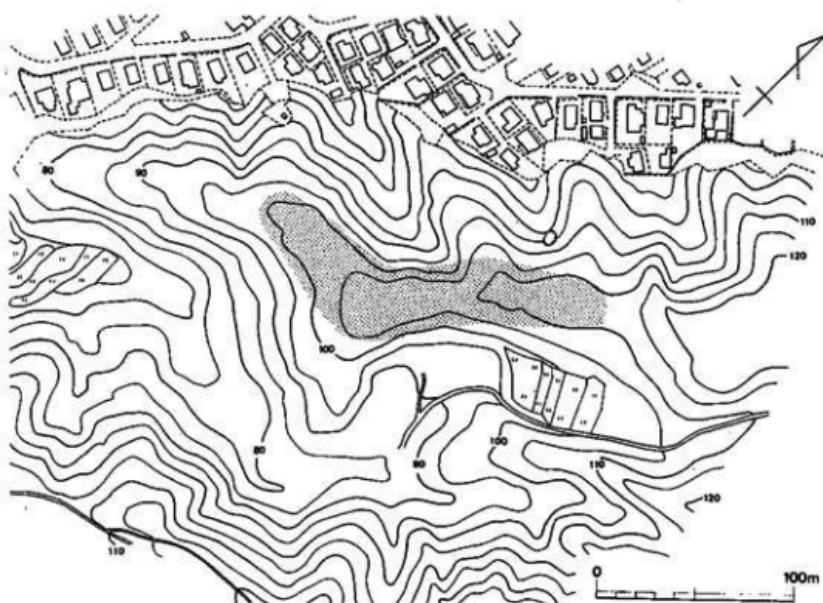
1 : 50,000

- 1 豊谷遺跡 2 木ノ宗山遺跡 3 小河原遺跡 4 長崎古墳群 5 烏帽子岩遺跡
- 6 慾の谷遺跡、7 豊谷鐵塔上貝塚 8 安芸小学校貝塚 9 大原貝塚 10 森垣内貝塚
- 11 清水谷古墳 12 岩谷觀音貝塚 13 中山貝塚 14 金碇古墳 15 下岡田遺跡

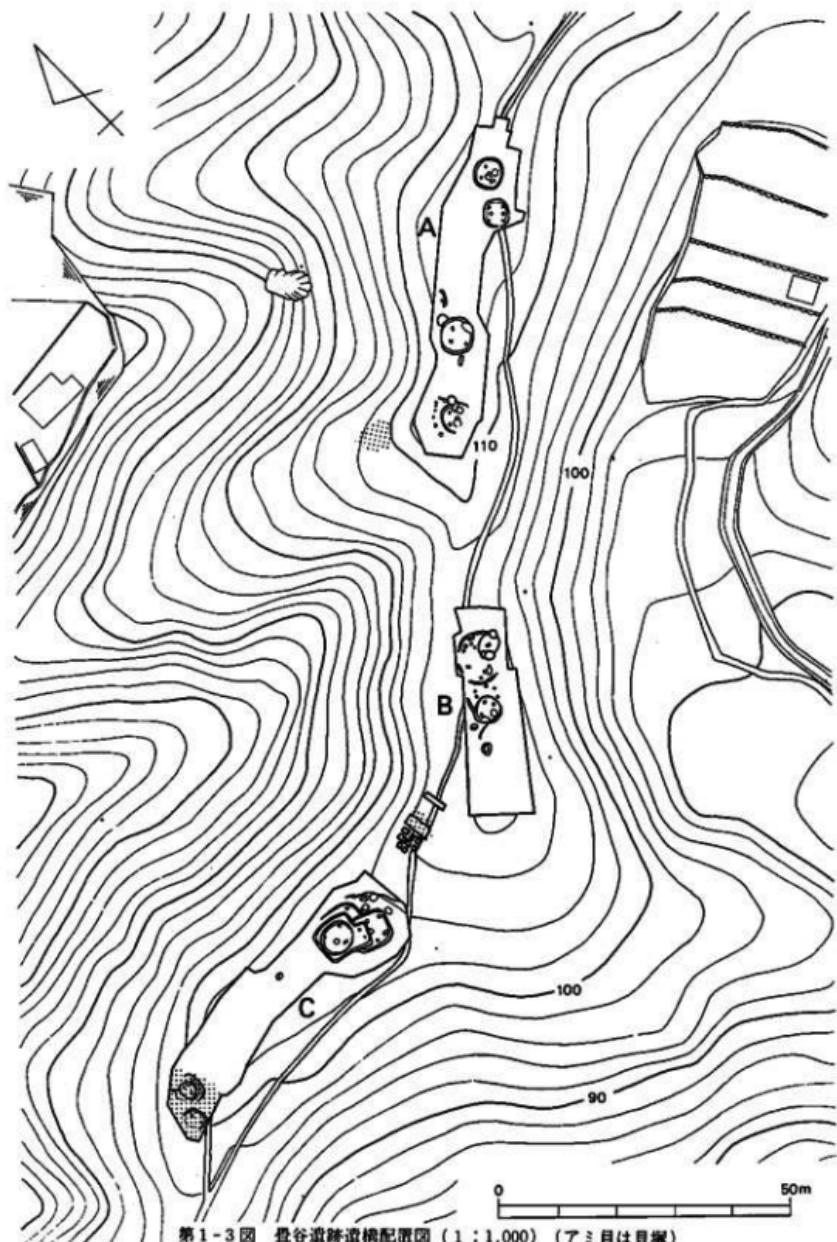
## (2) 調査の概要

豊谷遺跡は北西から南西に延びる尾根線上の平坦面にある。この平坦面がわずかな比高差をもって分かれ、また貝塚が各々の平坦面の南西斜面に3ヶ所認められたため、北西側からA・B・Cの3地点に分けて発掘調査を行った。

A地点は尾根線を中心に長さ約60m、幅約10mの約600m<sup>2</sup>を発掘した。表土は平均約40cmの厚さで、表土直下は花崗岩風化土の地山面となる。遺構は弥生時代後期の住居跡4(SB1~4)、住居跡状遺構1(SX16)、壺棺1(SP38)、土壙・ピット多数がある。A地点の北西部の貝塚については現状保存することになったため調査区から除外した。



第1-2図 豊谷遺跡周辺地形図 (1:1,500) (アミ目は遺跡)



第1-3図 畠谷遺跡遺構配置図 (1:1,000) (アミ目は貝塚)

B地点はA地点より約5m下の尾根上平坦面であり、長さ約35m、幅約10mの約350m<sup>2</sup>を調査し、さらに西側の約20m<sup>2</sup>の貝塚の発掘も行った。遺構は弥生時代後期の住居跡4(SB5~8)の他、土壙6を検出した。このうちSB8については、焼失した柱材が残っていたことから、現地より遺構そのものを移築することとなり現地で樹脂加工の後切り取って保存した。

C地点はB地点の下約6mの尾根上平坦面にあり、長さ約55m、幅約10mの約550m<sup>2</sup>を調査した。C地点最東部では弥生時代から古墳時代にかけて連続して営まれた住居跡5(SB9~13)を検出し、西端部からは貝塚及びその下面にある弥生時代後期の住居跡2(SB14・15)を検出した。C地点の中央部は近年の植林のために削平された可能性が強い。

なおA地点は昭和49年4月25日に「豊谷弥生遺跡群」の名称で広島県史跡に指定され、環境整備が行われて公開されている。又、SB8は樹脂加工の後、切取保存している。



豊谷遺跡環境整備後の状況

### (3) 遺構と遺物

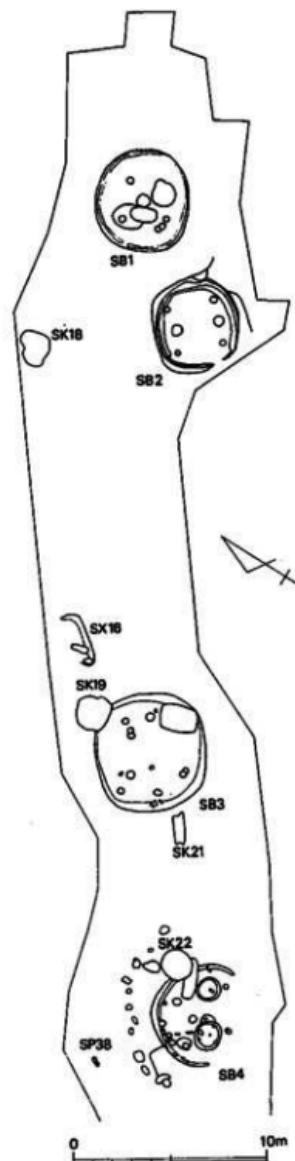
#### 1. A 地点（第1-4図）

A 地点では住居跡 4 (SB 1~4), 住居跡状遺構 1 (SX 16), 土壙 10 (SK 17~27), 壺棺墓 1 (SP 38), 土壙墓 1 (SK 21) を検出した。

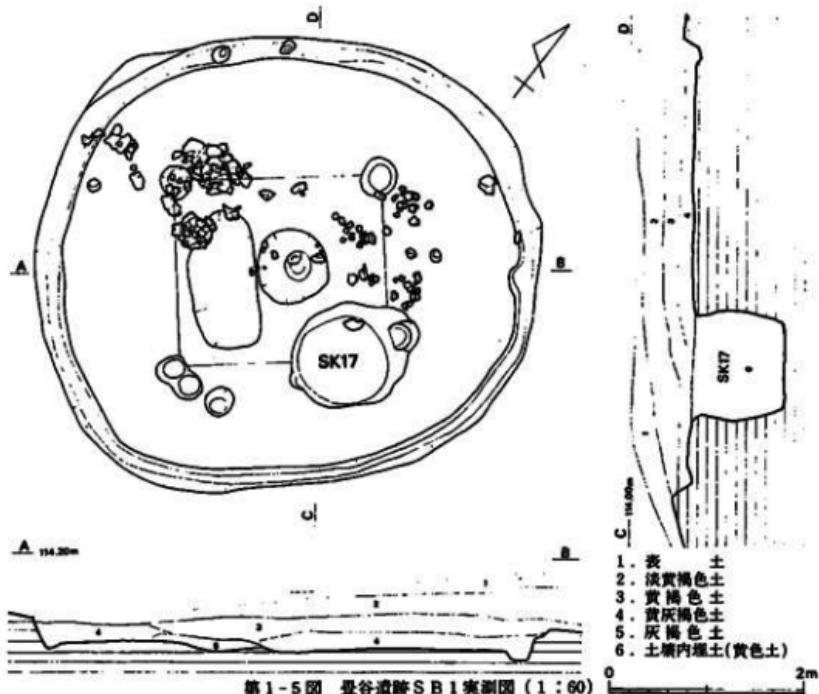
遺構は地山面に掘込まれて検出されたもので、北部から SB 1・2, 中央部から SB 3, SX 16, SK 19・20 と SK 21, 南部から SB 4, SK 22~26 と, 壺棺 SP 38 を検出した。

#### SB 1 (第1-5図)

SB 1 は長径約 5.3 m, 短径約 3.5 m, 深さ約 30 cm の円形竪穴住居跡で幅約 20 cm の壁溝が遺存する。主柱は四本と思われるが、南西部の柱穴については住居跡床面に掘込まれた土壙 SK 17 のために明確でない。又、深さ約 30~40 cm のピットが西側に見られる。主柱穴の深さは平均して 50~70 cm であり、各柱穴の間隔は約 2 m である。床面中央には浅い土壙が 2 カ所あるが炉跡かどうか明確でない。この 2 つの小土壙は、SB 1 と同時期のものであるが、SK 17 は貯蔵穴の可能性があるものの時期については明確ではなく、SB 1 以前の遺構かもしれない。SK 17 の埋土は花崗岩風化土壙の明黄褐色砂質土で、地山の土とは基本的には異なるため土層上での新旧の判断はつかないが、



第1-4図 豊谷遺跡A地点遺構配置図  
(1:300)



4本柱のうち1本の適正な配置位置に土壤を掘込む事は考え難く、住居跡構築前の造構としてとらえたい。SB1床面からは弥生時代後期の土器がかなり出土している。

#### 出土土器 (第1-6, 1-7, 1-8図)

##### 壺形土器 (1, 7~12)

1は器高30.5cm、口径18cm、胴部最大径29cmの完形土器で、口縁は外反し、端部は斜め下方に広く拡張する。端部外側には2条の凹線が廻る。胴部外面はナデ、内面は頸部やや下方よりヘラ削り調整。7は器高33cm、口径12cm、胴部最大径24cmを測り口縁端部に上方にわずかに拡張し、外側には4条の擬凹線が廻る。肩部外面にはハケ状工具により流水文様が施されている。下方にカーブする文様は外側5ヶ所に付される。胴部外面はハケ調整、内面は頸部が横位のヘラ削り、以下は縦位のヘラ削りである。12は高さ32.5cm、口径12cm、胴部最大径24cmで、外反するやや長い口縁をもつ口縁端部は若干広く平坦面が形成され4条の擬凹線がめぐる。胴部外

面は風化が著しいため明瞭ではないかハケ調整されている。内面は頸部以下ヘラ削り。8は外面ナデ。9は直立気味の頸部からわずかに外反する口縁をもつ器形のもので、頸部外側はハケ調整、内面はナデ。10は小形のわずかに外反する直口壺で器壁は薄い。口縁部内外面共にナデ調整される。

#### 變形土器（2～6、13～18）

2は「く」の字状に外反する口縁部の外側を斜め上方に拡張し、4条の凹線が廻る。外面頸部直下には二枚貝腹縁による刺突文が廻る。胴部内面は頸部以下ヘラ削りされる。3、6、16は口縁端部外側に凹線が施され、肩部にはヘラ先による刺突文が認められる。4は口縁部が上下に拡張され横ナデ調整が施される。5は「く」の字状に外反する口縁を持つ土器であるが、胴部外面にハケ目痕が残る。13、17は「く」の字状に外反する口縁を持ち、口縁端部は上方にわずかにつまみ上げられる。17は器表が磨滅しているため明瞭ではないが、13同様に胴部外面がハケ調整されるものと思われる。14、18は小形の球形に近い胴部に「く」の字状の口縁をつけたものである。14の胴部外側は扁平の上にヘラ磨きが行われ、内面はハケ状工具によるナデが認められる。18の肩部にはヘラ状工具による格子状文様が施されている。

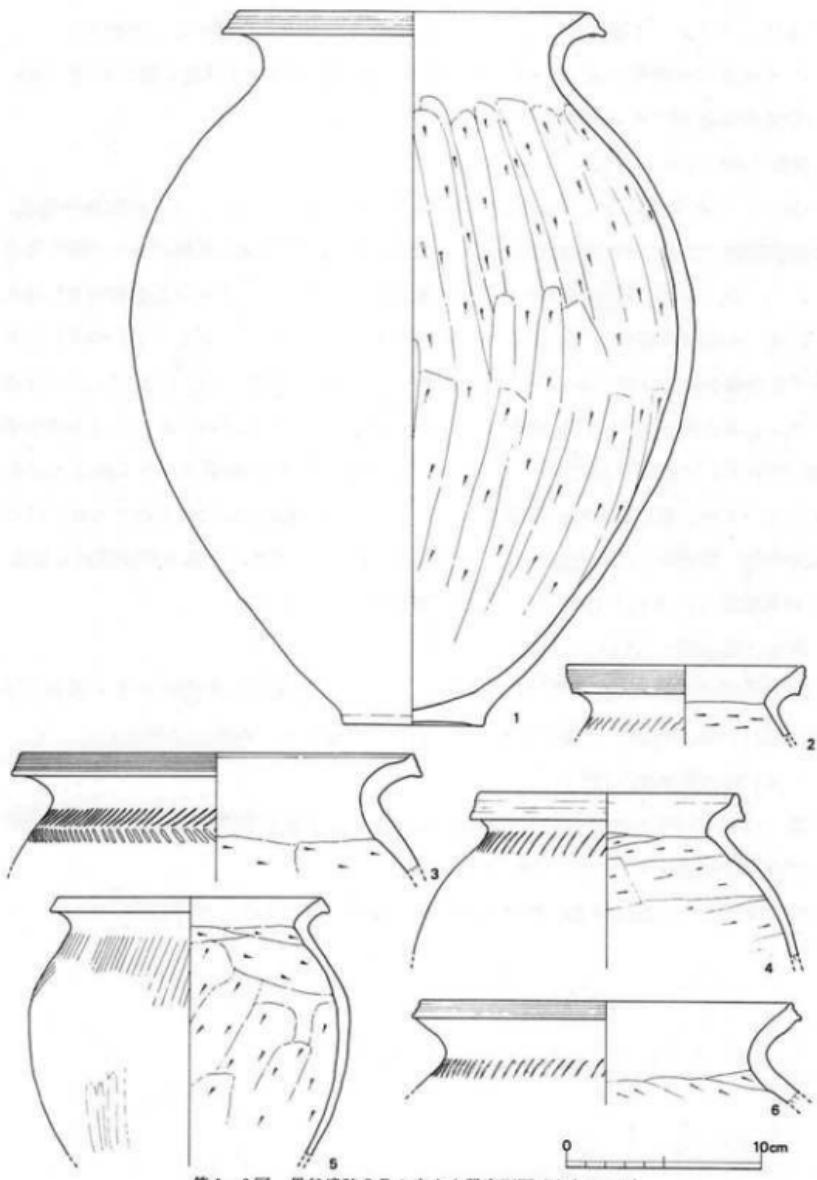
#### 鉢形土器（19・23）

23は台付のもので胴部の外側はハケの上をナデ、内面はヘラ削りの上を横位にナデ。19は口縁が内傾し、深鉢形となる。調整は外面ハケ、内面ヘラ削り。

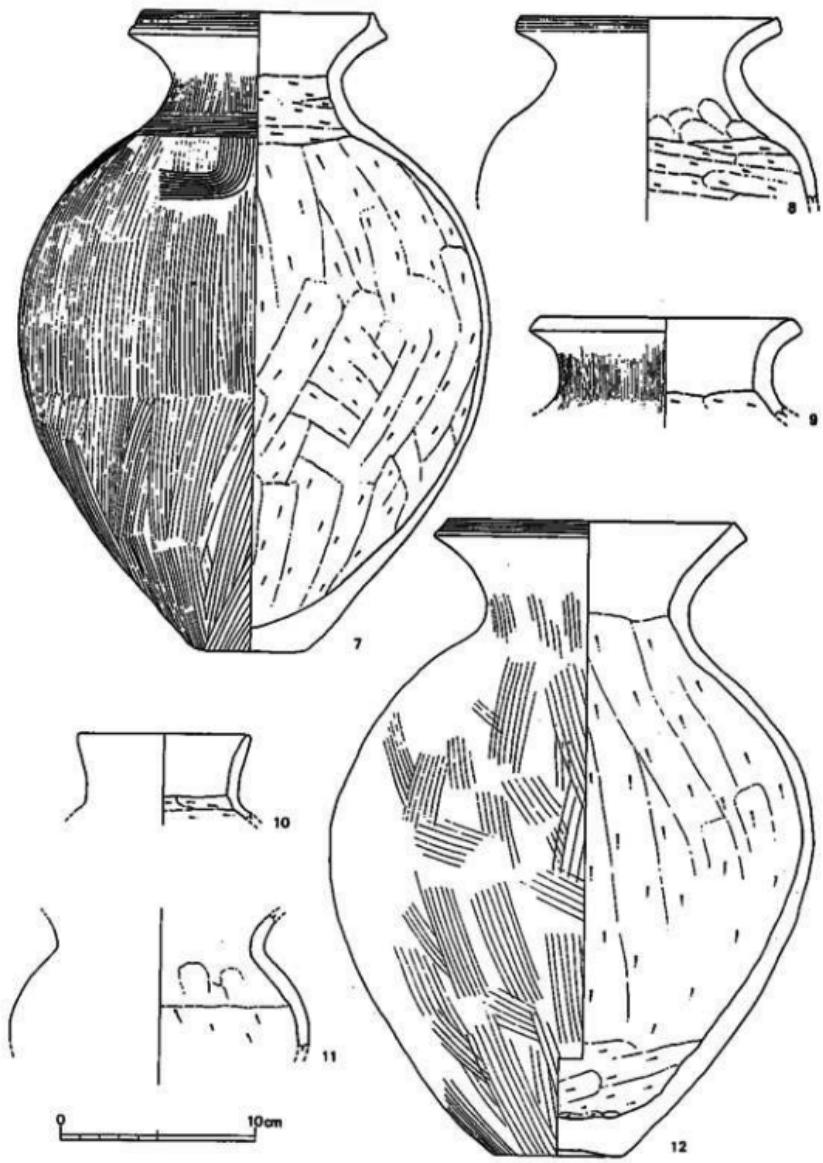
#### 手づくね土器（20～22）

20・21は手づくねによる成形のままであるが、22は最終調整が施されていてヘラにより外面が縦位にナデられ、内面は削られる。

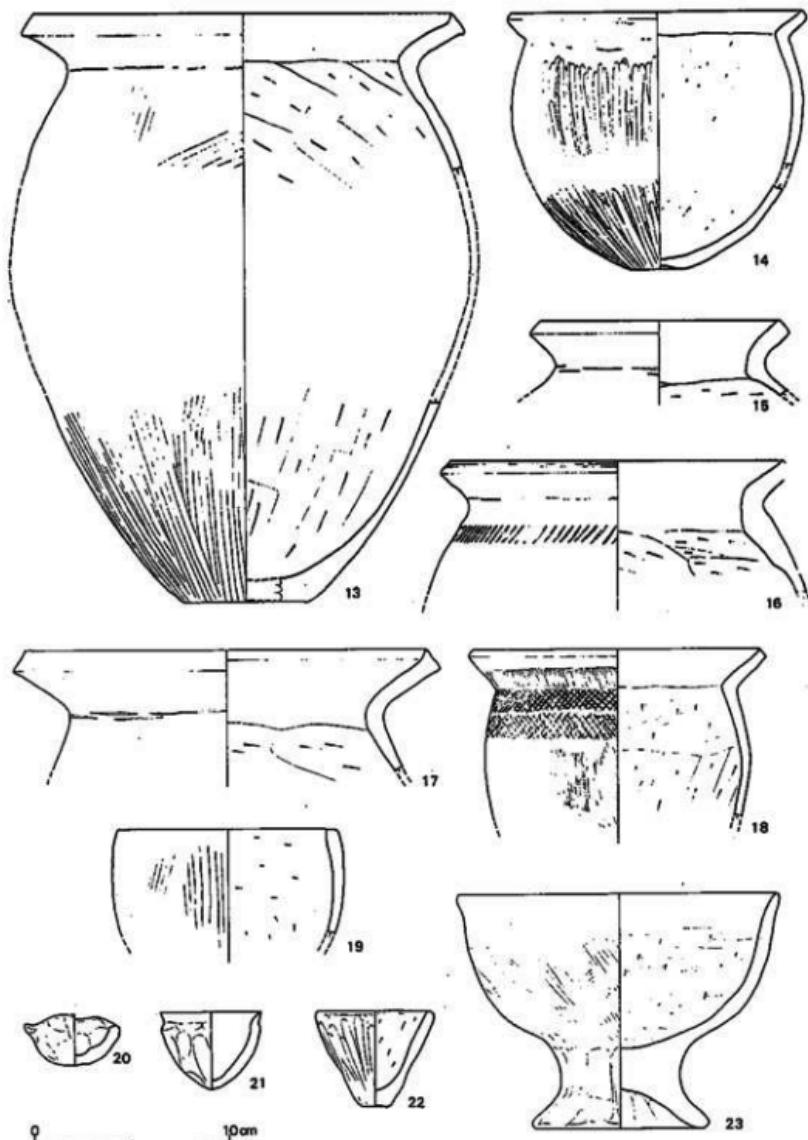
S B 1 出土の土器は弥生時代後期中葉から後葉にかけてのものである。



第1-6図 畠谷遺跡SB1出土土器実測図(1) (1:3)



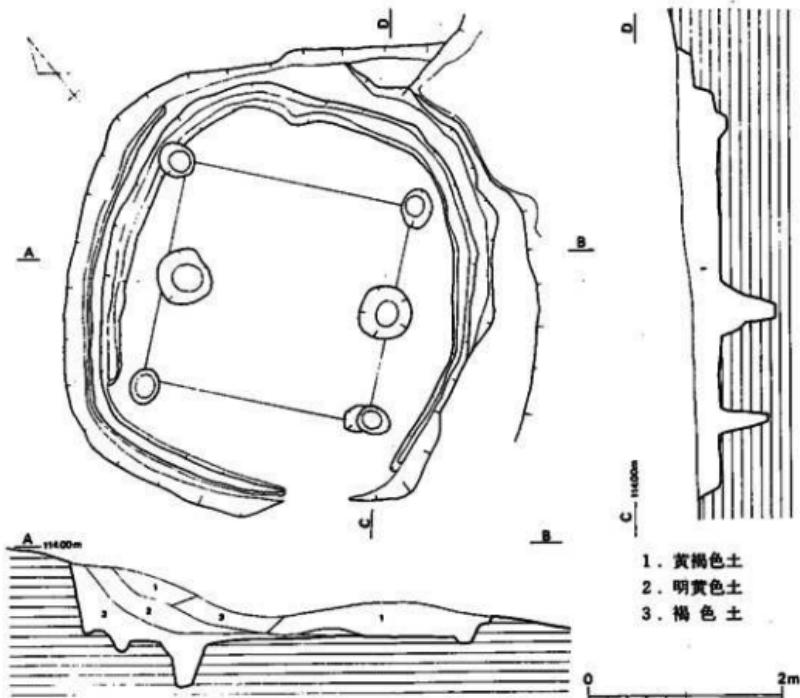
第1-7図 畠谷遺跡SB1出土土器実測図(2)(1:3)



第1-8図 畠谷遺跡SB1出土土器実測図(3)(1:3)

### SB 2 (第1-9図)

SB 2は、SB 1の南側に位置し、丘陵頂部平坦部から南東斜面への傾斜変換点に掘込まれた長辺約4.5m、短辺4.1mの隅丸方形竪穴住居跡である。壁高は最高約70cm、最低約25cmで幅約20cmの壁溝が遺存する。壁溝の状態からは一度小規模の建替えが行なわれたと思われる。主柱穴は床面北西と南西部にある2本で各主柱穴の両側1.1mの部位に副柱穴1対があり、総計6本柱の上屋構造であったと推定される。主柱穴の間隔は2.1mで深さは約50cmであり、副柱穴の深さも平均して主柱穴同様の深さである。この場合副柱穴の掘方は垂直であり、主柱に対して副柱が斜めに架られていた柱構造を示すものではない。床面には炉跡は確認されていない。埋土中より弥生土器が出土した。



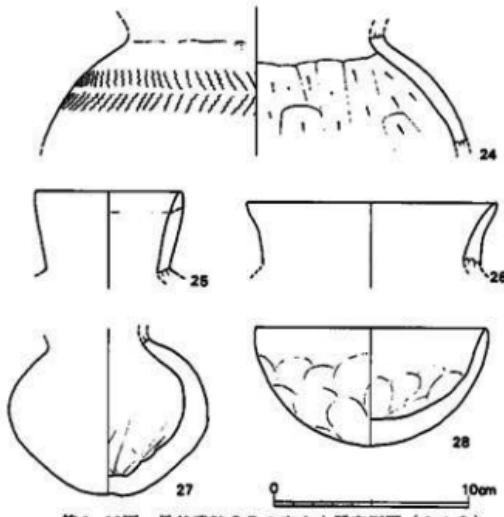
第1-9図 畠谷遺跡SB 2実測図 (1:60)

出土土器（第1-10図）  
 壺形土器（24・25・27）  
 24の肩部には二枚貝腹縁による刺突文が施されている。25・27は長頸壺で内外面ナデで最終調整されている。

變形土器（26）  
 単純な口縁端をもつ器形で内外面ナデ調整。

鉢形土器（28）  
 手づくねで作られナデで仕上げられている。

S B 2 出土の土器は、胎土・焼成共に良好なものが多い。時期は弥生時代後期の後葉に比定されよう。

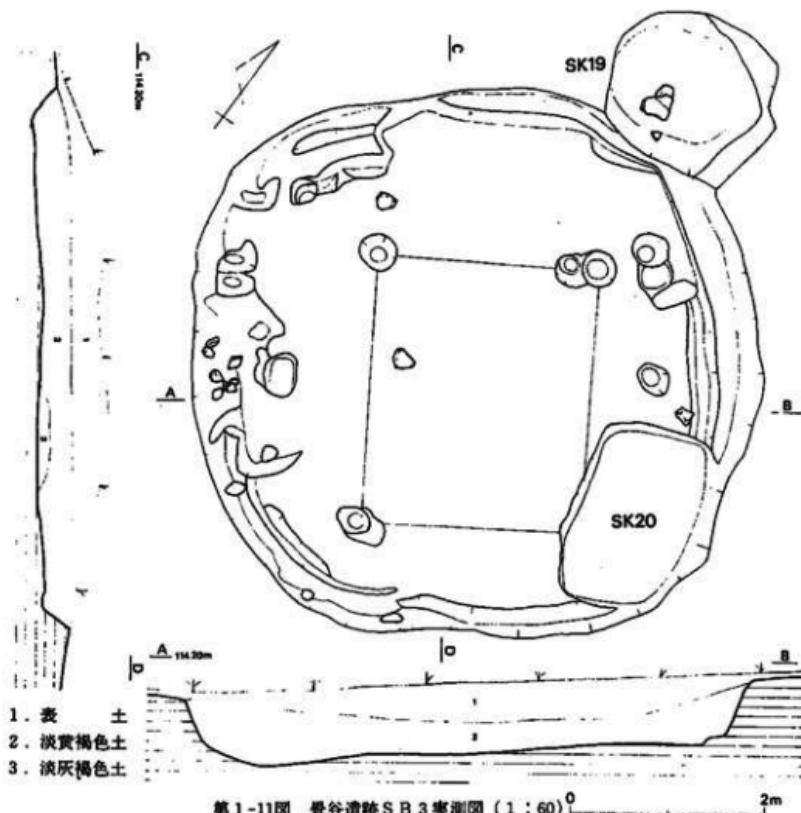


第1-10図 畠谷遺跡 S B 2 出土土器実測図 (1 : 3)

### S B 3 (第1-11図)

S B 3 は A 地点中央部やや西寄りの丘陵頂部中央に位置する一辺約 5.5 m の不整円形住居跡である。壁高は 60~30 cm, 壁溝は部分的に明確ではないが、幅約 20 cm の規模で廻っていたと思われる。柱穴の配置から 4 本柱の上屋構造を持つものと推定される。各柱穴の間隔は約 2.7 m である。炉跡は明確でないが、床面中心からやや南東に偏した部位に灰褐色土層を検出し、短期間にこの部位が炉として機能を果たしていた可能性が考えられる。床面東部隅には方形の土壙 S K 20 を検出したが、深さは約 50 cm で S B 1 に伴う貯蔵穴の可能性をもつものである。また、壁北側には S B 3 を切込んで土壙 S K 19 が掘られている。S K 19 は深さ約 1.5 m, 径約 1.5 m の土壙で、上層には人頭大の角石が存在していた。構築時期は S K 20, S B 3 よりは新しく、これが土壙墓とすれば、上部の石は墓標石であるかもしれない。

S B 3 の埋土中及び床面からは弥生時代後期の土器、鐵器片(形状不明)、砾石が出士した。なお埋土上層(表土直下)からは S B 3 埋土内出土の土器より新しい古墳時



第1-11図 畠谷遺跡SB 3実測図 (1:60) 0 2m

代の土器が出土している。

#### 出土土器

SB 3では上層と埋土中から大きく2時期に分けられる土器が出土した。

#### SB 3下層出土土器（第1-12図）

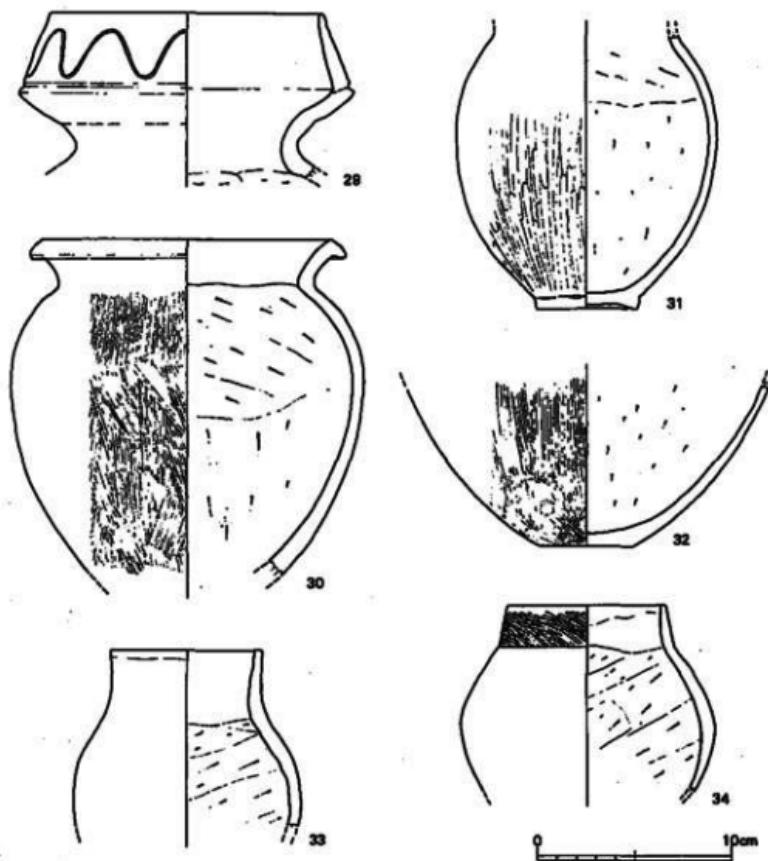
##### 壺形土器（29・33・34）

29は典型的な複合口縁の土器である。内傾した口縁部の外側にはヘラ先により波状文が施されている。全体に横方向にナデで丁寧に調整されている。色調は明橙色を呈し、胎土は精良、焼成も堅緻である。33・34は短頸壺で、肩の張らない胴部から短かい口縁が直立（33）、内傾（34）して形成されている。胴部外面はナデ、内面はヘラ削

りであり、33の口縁部は内外面共にナデ、34は内面ナデ、外面は細かいヘラ磨きが施されている。

變形土器 (30・32)

31の胸部外面はハケ調整。



第1-12図 番谷遺跡SB3下層出土土器実測図 (1:3)

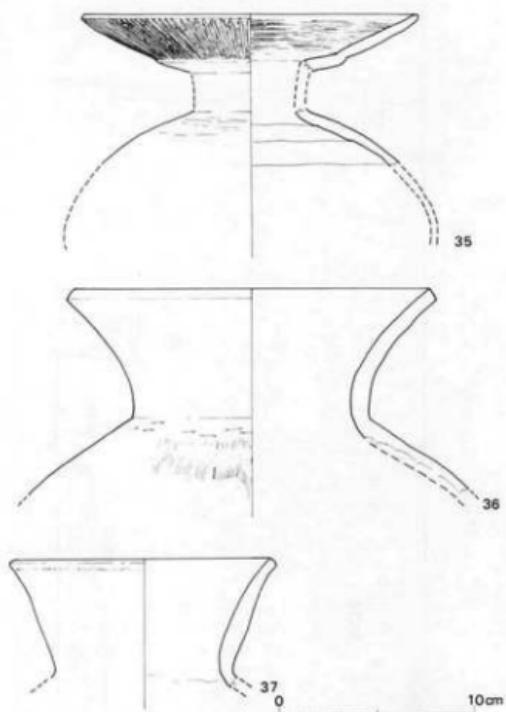
S B 3 上層出土土器

(第 1-13 図)

壺形土器 (35~37)

35 は直立した頸部から広く朝顔形に外反する口縁を持つ土器で、胴部は扁平な球形になると思われる。口縁部は横位に細かいハケで調整され、外側はその上に暗文風にヘラ磨きされる。胴部外面はナデ、内面は輪積み痕が明瞭で未調整のままである。色調は暗赤褐色で胎土も精良であり、疊谷遺跡出土の他の土器とは全く様相を異にし、搬入品の可能性が強い。

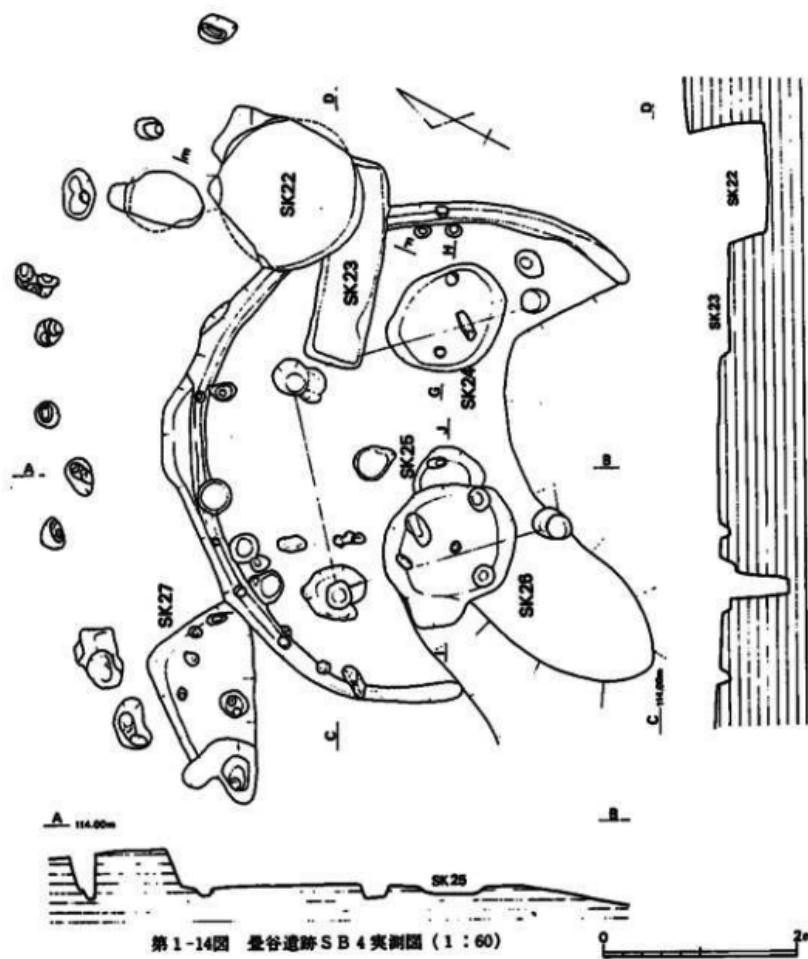
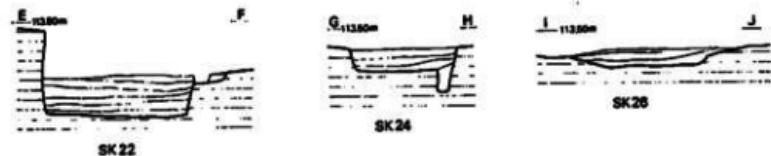
36・37 は、胴部より直に長く外反する単純口縁を持つ器



第 1-13 図 疊谷遺跡 S B 3 上層出土土器実測図 (1 : 3)

形の土器である。口縁部は内外面共にナデ。胴部は外面がハケ、内面がヘラ削りによる調整と思われる。色調は青灰色がかった明褐色であり胎土はやや粗い。

S B 3 出土の土器のうち下層出土のものは弥生時代後期後葉のものであり、S B 3 の時期を示すものと考えてよい。上層出土の土器群は古墳時代初期の様相を強く持ち、特に搬入品の色濃い 35 は畿内風の器形、調整法が強く示され、36・37 も畿内布留 I 式土器と共に通の器形をもつ。



#### S B 4 (第1-14図)

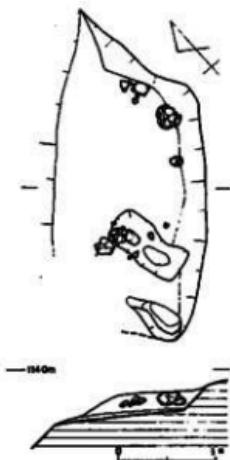
S B 4 は A 地点最南部の平坦面端部に位置する径約 5.3 m の円形住居跡である。南側は斜面となり大きく床面が崩れている。壁高は現存高約 80 cm を測る。壁溝は幅約 10 cm、深さ約 8 cm の規模でめぐっている。柱穴の配置から見て 4 本柱上屋構造が推定されるが、他にも大小多くのピットを検出した。特に壁溝沿いに小さなピットを多く検出し、柵あるいは壁の崩落を防護する施設の存在を想定させた。

住居跡の内外には多くの土壙・ピットを検出したが、住居内の S K 24・25・26 は S B 4 と同時期の遺構と考えられ、特に S K 24 は土壙内に砾石が置かれその両側に対になつたピットがあり作業用の土壙と思われる。S K 25・26 についても同様の作業用土壙と考えてよいであろう。

住居跡内から北東部外側にかけて切りあって掘られている S K 22・23 は S B 4 埋没後に掘られたものである。S K 23 は長さ約 2.1 m、幅約 60 cm の長方形土壙である。形状から見て土壙墓であった可能性が強い。S K 22 は S K 23 を切って掘込まれている。径約 1.5 m、深さ約 80 cm の円形土壙で、若干掘方底部近くが広がり袋状を呈する。S K 22 の形状は貯蔵穴的ではあるが用途については全く不明である。S K 22 内の埋土は黄褐色土が薄く何重にも堆積している。

S B 4 の北西壁の外側約 1.7 m の部位には小土壙が円弧状に並ぶ。これらの土壙群は、深さ約 40~70 cm 前後で、底面の形が整っていない。木根の可能性は充分にあるが円弧状に並ぶ配列から見て S B 4 の住居外にある何等かの付属施設の存在も考えられよう。

S B 4 住居内埋土中からは弥生時代後期の土器片、砾石が出土しているが図示できるものはなかった。



S X 16 (第1-15図)

S X 16 は、S B 3 の北側の丘陵頂部平坦面から北西斜面にかけての傾斜変換点にあるテラス状の落込みである。このテラスは長さ約 2.6 m、幅約 1.5 m の方形に地山を削平していく、壁の最大高は約 30 cm である。北側部分は斜面のため崩落していく現状は不明である。規模の小さい事の他、壁溝、柱穴等も検出できず住居跡として性格づける事は出来ない。平坦面には不定形の浅い土壠が 2ヶ所に認められるが機能は不明である。この埋土中からは古墳時代初頭の遺物と思われる土器が出土している。SX 16 の時期もほぼその頃と推定される。

出土土器 (第1-16図)

第1-15図 叠谷遺跡  
SX 16実測図 (1:60) 壺形土器 (38~42)

いずれも長胴形の土器で底部は丸く、器表面は手づくね様に凸凹がある。38・40の胴部外面の仕上げはナデ、39の胴部外面はヘラで削られて形成された後にナデで仕上げられている。38~40共に内面は口縁部から胴部中位にかけて指頭押圧のままで、胴部中位以下はヘラ削りである。胎土は精良で焼成も良いが定形化した器表調整が行われていない。器形そのものは古墳時代初頭の土器形式を踏襲している。色調は明灰褐色を呈す。

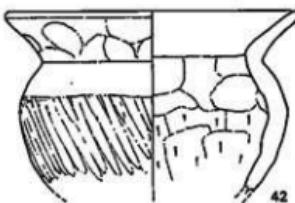
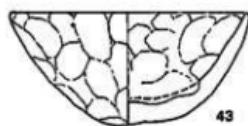
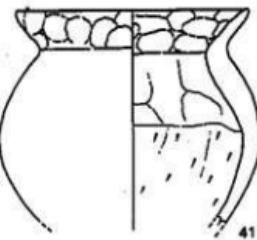
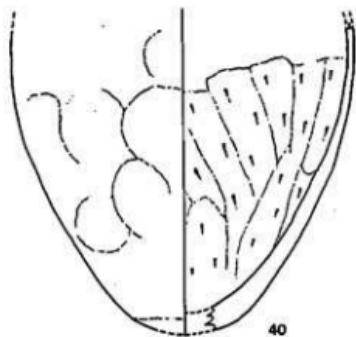
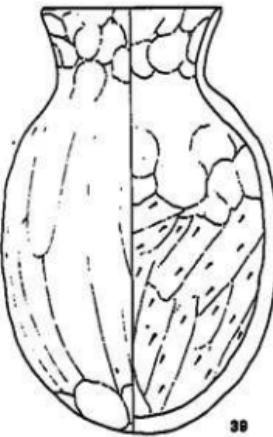
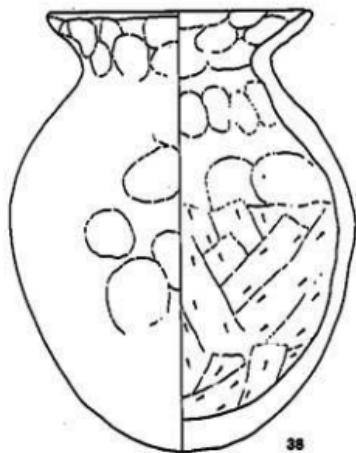
#### 壺形土器 (41・42)

口縁部は壺形土器と同様に手づくね様の成形法で、仕上げはナデである。41は胴部外面がナデ、42は胴部外面の中位にヘラでナデられた様な痕跡が認められる。胴部内面は中位まで指頭押圧で、中位以下はヘラ削りされる。41・42共に赤褐色で胎土は粗く焼成もあまり。

#### 鉢形土器 (43)

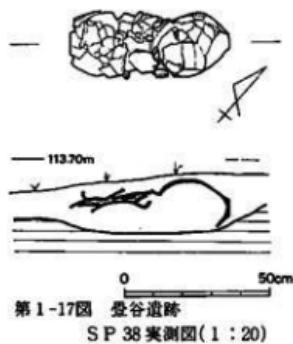
手づくね後に薄くナデて仕上げられている。色調・胎土・焼成共に壺形土器と同様である。

S X 16 出土の土器はその器形・技法が特異であるが、器形の部分的な特徴から見て古墳時代初頭のものと思われる。



0 10cm

第1-16図 畠谷遺跡 S X16出土土器実測図 (1:3)

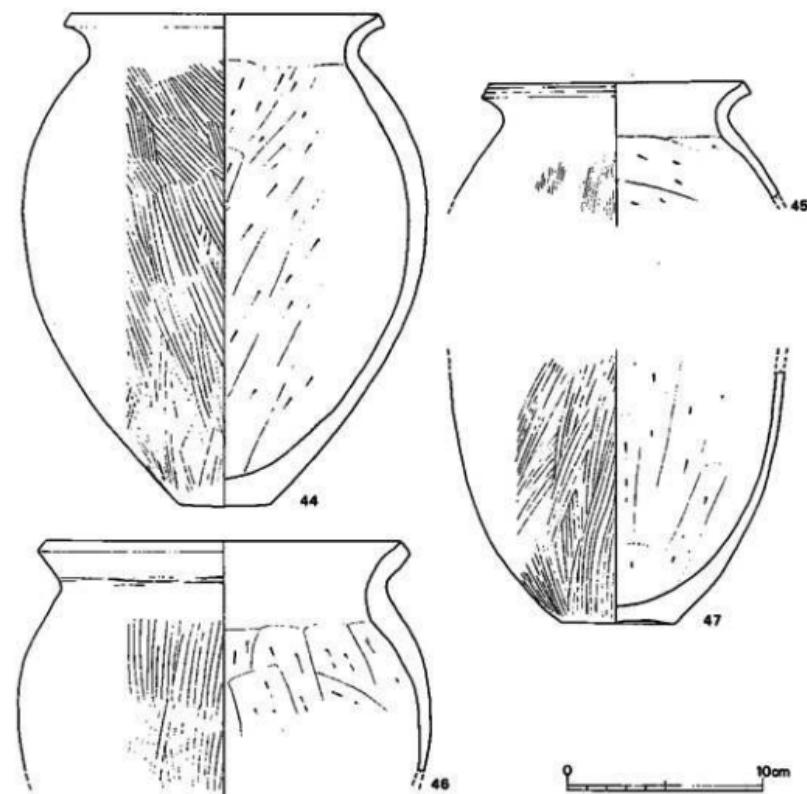


第1-17図 畠谷遺跡

SP 38 実測図(1:20)

### SP 38 (第1-17図)

SP 38は、SB 4の北西部の平坦面の表土直下で検出した壺棺墓である。構造は壺形土器を2つに半截し、各々の口を合わせて伏せて置き、その上に4ないし5個体の土器の破片を覆い被せている。地山の花崗岩風化土壌の表土への移行が進み、土壤等の形状は明確ではない。旧状は、土壤に幼児を埋葬し土器を被覆した後に小規模の盛土を行ったものと推定される。

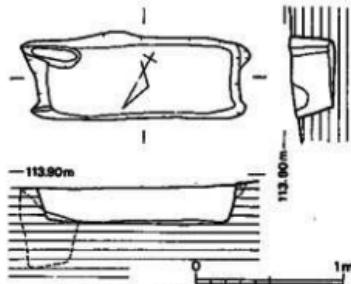


第1-18図 畠谷遺跡 SP 38出土土器実測図(1:3)

壺棺に使用された土器は弥生時代後期中葉のものでSP 38の時期も同一と見てよいであろう。

#### 土器 (44~47) (第 1-18 図)

壺棺本体に使用された半截土器は 44 である。やや肩の張る胴部で、外面は太目のハケ調整、内面は頸部以下ヘラ削りである。被覆の補助に使用された土器片は 4~5 個体のものであるが、そのうち 3 点 (45~47) のみが図示できた。45 は口縁端部外側に 3 条の凹線が認められる。45~47 共に胴部の調整は外面ハケ、内面ヘラ削りによる。



第 1-19 図 登谷遺跡  
SK 21 実測図 (1 : 40)

#### SK 21 (第 1-19 図)

SB 3 の南側直近で検出した土壙基である。長さ約 1.4 m、幅約 50 cm、深さ約 25 cm の長方形の土壙で東部端には幅 10 cm の深い落込みがあるが木根の搅乱であろう。本来は木棺が土壙内に組まれていたものと思われる。時期は不明であるが、SK 19 などが近くにあり SB 3 よりも新しい時期のものと考えられる。

#### 貝塚

A 地点発掘範囲から南西部にのびる丘陵斜面には貝塚が存在する。貝の散布状態から見て 4~5 m 四方の規模の貝塚があると思われる。B・C 地点の貝塚の性格と同様に A 地点の住居跡群と関連する遺構である。

## 2. B地点（第1-20図）

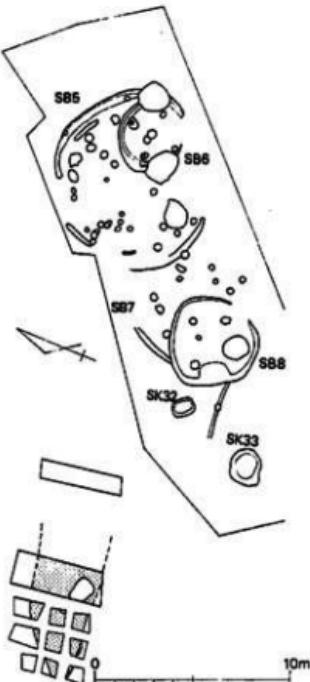
B地点では住居跡4(SB5~8), 土壙6(SK28~33)を検出した。

B地点の丘陵先端部は小高く、遺構の存在が予想されたが、住居跡群を検出したのは先端より北東側のやや低位の鞍部であった。住居跡は北側からSB5・6を重複して検出し、その南側にSB7がSB5に北部を切られて、さらにSB7南側を切ってSB8が掘込まれていた。

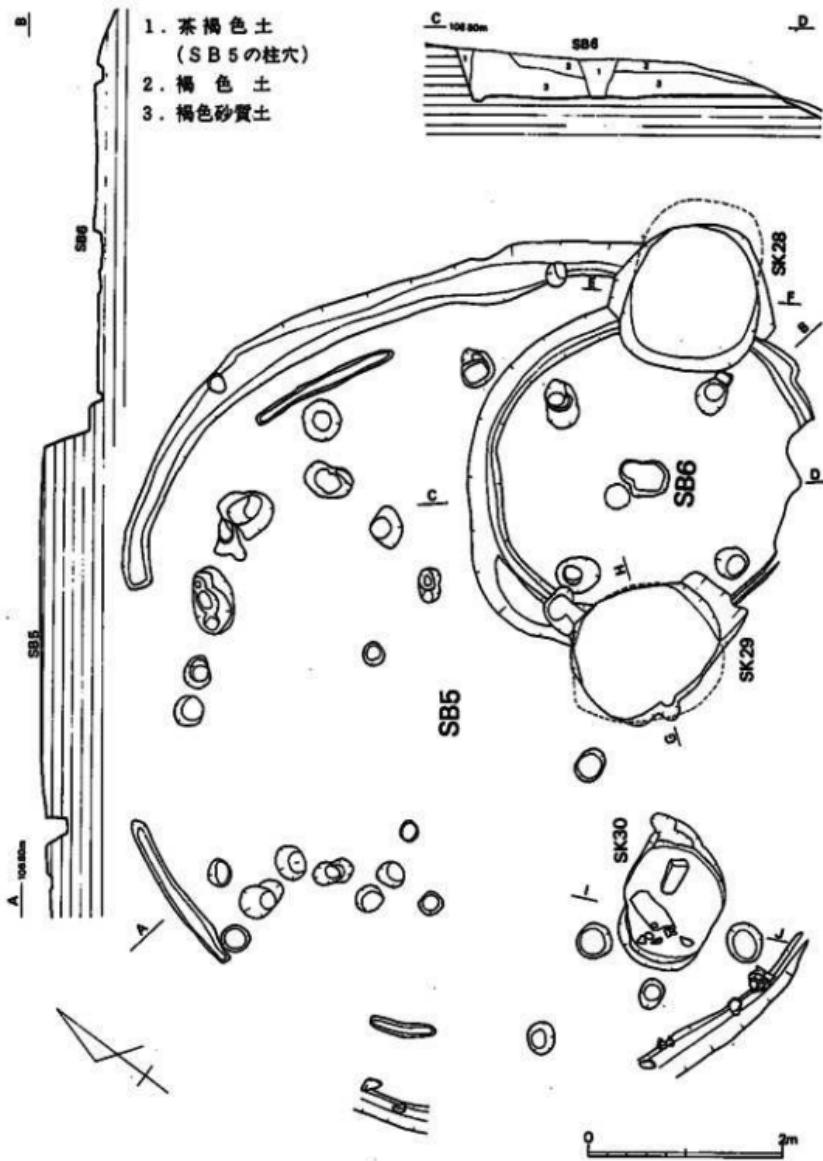
B地点発掘範囲から西側にのびる丘陵尾根上には貝塚があり、トレンチを設定して調査した結果、カキ、アサリなどの貝類に混って弥生時代後期の土器が多量に出土した。

## SB5（第1-21図）

SB5は丘陵頂部から南東部斜面にかけて営まれた最大径約8.8mの大形の円形住居跡である。壁高は北西部で最大約50cmを測るが、南西部の斜面のため崩れています。壁溝は幅約15cmで廻っている。また、壁沿いから50~70cm内側にかすかに円形に廻る壁溝が部分的に遺存し、SB5が建替えられて拡張された住居跡である事を示している。柱穴は床面で多数検出し、主柱穴の配置が明確でない。恐らくSB5が大形の住居であったため柱穴が円弧状に多数設けられていたものと思われる。炉跡は検出できなかった。床面南東部にはSB6, SK28・29・30があるが、SB6はSB5より古く、SK28・29は新しく、SK30のみがSB5に伴うものである。SK30は断面が袋状を呈し下部には板石が埋没している。貯蔵穴の機能を果たすものであろう。SK30からはモモの種と土製勾玉（第1-26図）が出土した。SB5の出土遺物には弥生時代後期の土器、鉄器（鎌）（第1-26図）がある。



第1-20図  
疊谷遺跡B地点 遺構配置図(1:300)  
(アミ目は貝塚)



第1-21図 畠谷遺跡SB5, 6実測図 (1 : 60)

### S B 5 出土土器 (第 1-23 図)

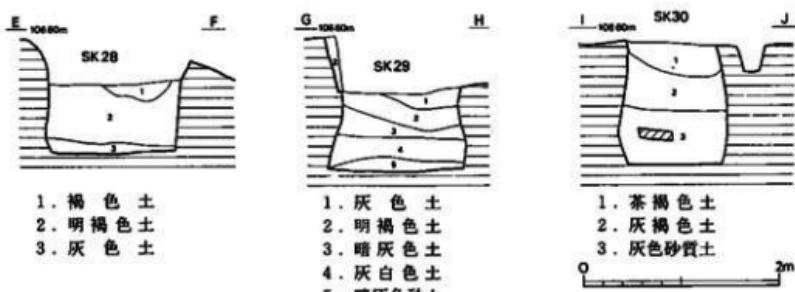
#### 変形土器 (48~52)

48 は器高 21 cm, 口径 16.5 cm, 脇部最大径 17.5 cm の完形土器で、器壁は薄い良好な遺存状態である。肩部にはヘラ先による刺突文が施される。口縁部内外面は横ナデ、脇部外面はヘラ削り成形の後にナデ、内面はヘラ削りのままである。49・52 の脇部外面はハケ調整、51 の口縁部は S B 5 土器群中でもやや新相を示す。

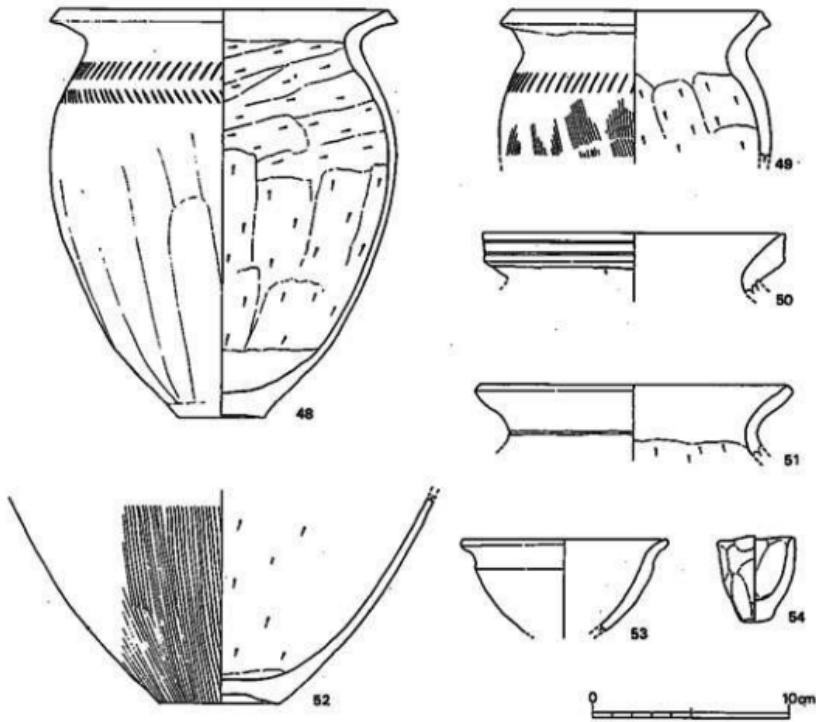
### S B 6 (第 1-21 図)

S B 6 は S B 5 床面東部にある径約 3.5 m の円形住居跡である。S B 6 埋没後に S B 5 が構築されているため壁高は旧状のままではないと思われるが現存値は最大約 50 cm を測る。南東部は斜面のために流れ去っている。主柱穴は約 1.7 m 間隔に正方形に配されている。床面中央にはごく浅い土壤があり、炉跡と思われる。北東部と南西部にはそれぞれ土壤 SK 28・29 が掘込まれているが、SK 6 の埋没後に掘込まれたものと思われる。さらに、堆積土の状況から見て S B 5 より新しい造構でもある。用途は両土壤ともに貯蔵穴の可能性が強い。

S B 6, SK 28 からは弥生時代後期土器が出土している。



第 1-22 図 豊谷遺跡 S K 28~30 土層断面図 (1 : 60)

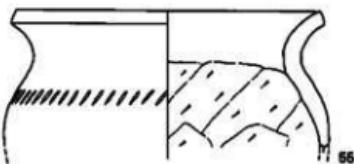


第1-23图 燕谷遗址SB 5出土土器实测图 (1 : 3)

### 出土土器（第1-24図）

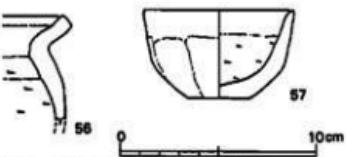
#### 変形土器（55・56）

55は器表の風化が著しく外面の調整は不明であるが、肩部にはヘラ先による削突文が施される。56はかなり小形の土器であり壺になるかもしれない。



#### 鉢形土器（57）

外面はヘラ削りの上をナデ、内面はヘラ削りにより調整されている。手づくね土器の系統のものである。



#### S K 28 出土土器（第1-25図）

(1 : 3)

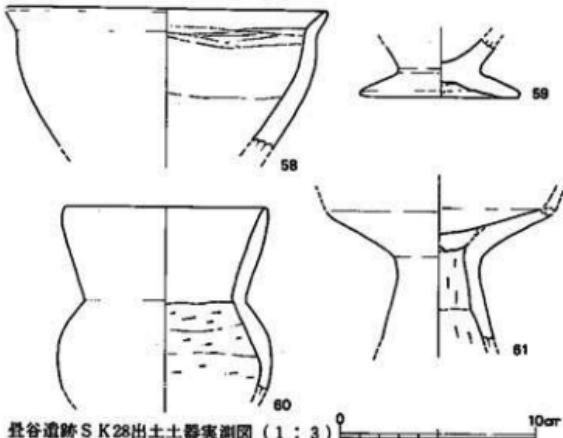
#### 鉢形土器（58・59）

58は内外面共風化が著しく調整が不明であるが、内面はヘラ削りと思われる。59は深鉢形土器の脚台部と推定される。

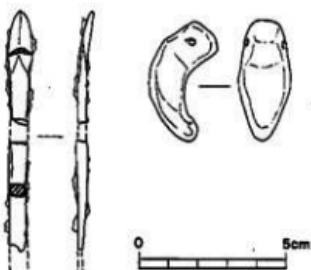
壺形土器（60）小形の壺で口縁は外方に長く広く開く。底部は不明であるが時期的に見て平底を残すと思われる。明赤褐色を呈し胎土は粗い。

#### 高杯形土器（61）色調・胎土共に（60）と同様で同一時期のものと思われる。

これらの土器は弥生時代終末から古墳時代にかけてのものであろう。



第1-25図 登谷遺跡SK 28出土土器実測図 (1 : 3)



第1-26図 畠谷遺跡SB5出土鉄器・SK30出土土製勾玉実測図（1：2）

### SB7・8

SB7・8はSB5の西側で切合って検出した。SB7は柱穴と壁高がかすかに残る住居跡で東側大部分をSB5によって切られ、西側大部分をSB8によって切られている。規模は不明確であるがSB5と同様に大型の円形住居になると思われる。

SB8はSB7を切込んで構築された径約4.5m、深さ約40cmの円形住居跡で、上屋が焼失した事を示す炭化材を床面で多数検出した。柱穴も3本確認し、柱穴の中にも炭化材が充満していた。4本柱の上屋構造が推定されるが、残る1本の柱穴は、SB8埋没に掘込まれた土壙SK31のために確認できなかった。

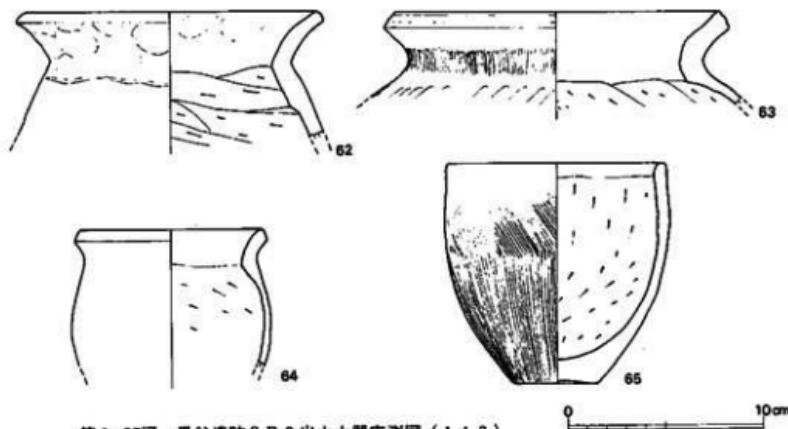
なお、SB8及び周辺のSB7の部分については遺存状態が良好なために造構そのものを保存する事となり、地山そのものに樹脂加工を加え固結させた後に約50cm角大に分割して切り取り保存した。

### SB8出土土器（第1-27図）

SB8からは弥生時代後期後葉の土器が出土している。

#### 斐形土器（62～64）

62は「く」の字状に外反する手づくね成形の口縁をもつもので、胴部は外面がナデ、内面が頸部以下ヘラ削り、63は外反した口縁の端部がやや広く成形され2条の浅い凹線が廻る。肩部にはヘラ先による刺突文が施されるらしいが風化が著しく不明瞭である。64は外面ナデ、内面ヘラ削り。



第1-27図 畠谷遺跡SB 8出土土器実測図 (1:3)

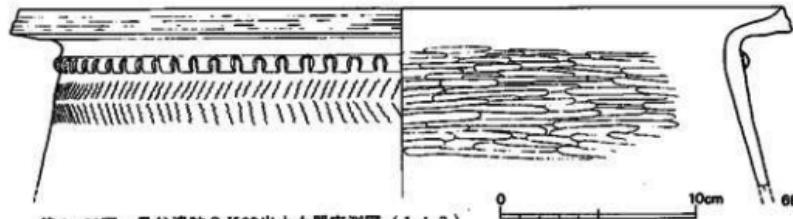
#### 鉢形土器 (65)

外面は細かなハケ調整が施され、内面はていねいにヘラ削りされている。

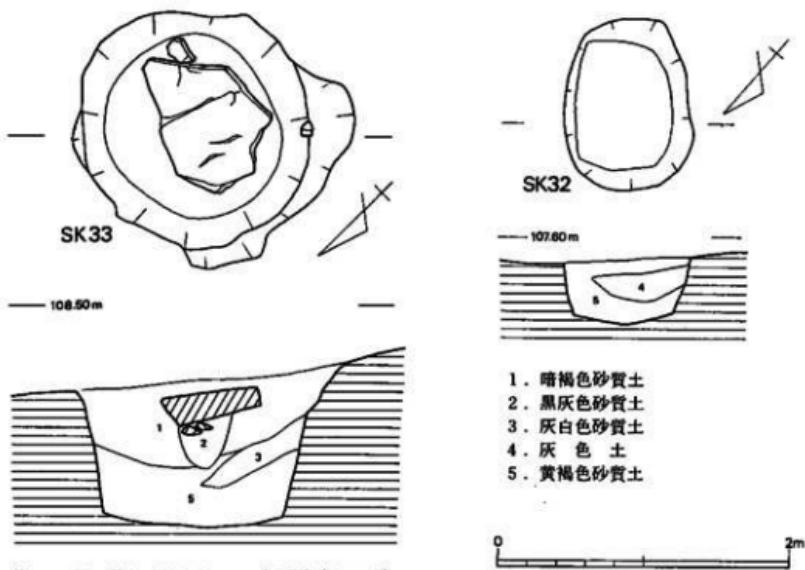
#### S K 32・33 (第1-29図)

S B 8の東側では S K 32・33 を検出した。S K 33は径約 1.8 m の円形土壙であり、埋没土上部には 1 m × 70 cm の板石が存在し、その下には黒灰色の砂質土を土壤状に検出した。

S K 32は長さ約 1.2 m、幅 0.8 m の方形に近い土壙である。埋土中より弥生時代中期終末の土器 (66) が出土した。土器の頭部直下には貼付け突帯が廻り、その下には二枚貝腹縁による刺突文が施される。内面はヘラ磨き。(第1-28図)



第1-28図 畠谷遺跡SK 32出土土器実測図 (1:3)



第1-29図 畠谷遺跡SK32-33実測図 (1:40)

#### B地点各所出土土器（第1-30図）

B地点では住居跡、土壤の他、表土層及び住居跡周辺の各所から土器が出土している。これらの土器はSB7と強い関連をもつと思われる。

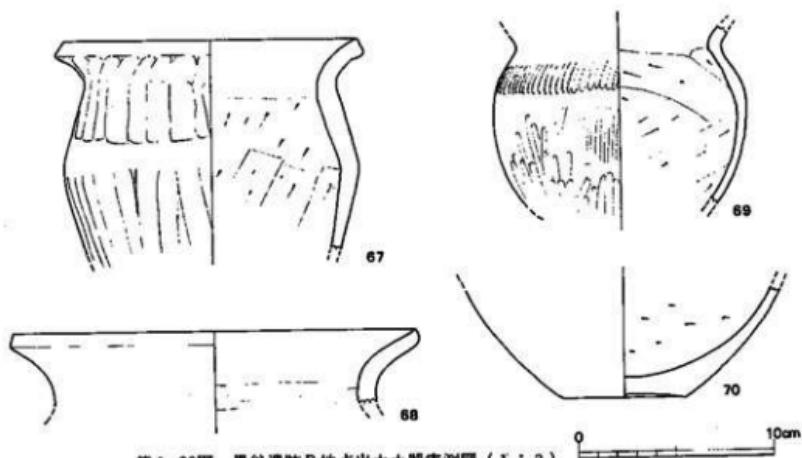
#### 変形土器（67~70）

67の外面はヘラ削りにより成形された後にナデで仕上げられている。68は内外面共にナデ。69の外面肩部にはヘラ先による押圧が文様風に廻る。胴部中位はハケ調整され、中位以下はヘラ磨き、胴部内面はヘラ削り。

以上の土器はいずれも弥生時代後期のものである。

#### B地点貝塚出土の土器（第1-31図）

B地点の西側尾根の南側斜面には貝塚があるが、トレンチ調査の結果、幅約4m、長さ約7mにわたり、カキ、アサリ、ハマグリを中心とする貝層が分布し、貝に混って弥生時代後期の土器が多量に出土した。これらの貝及び土器はB地点の住居群成員により廃棄されたものである。



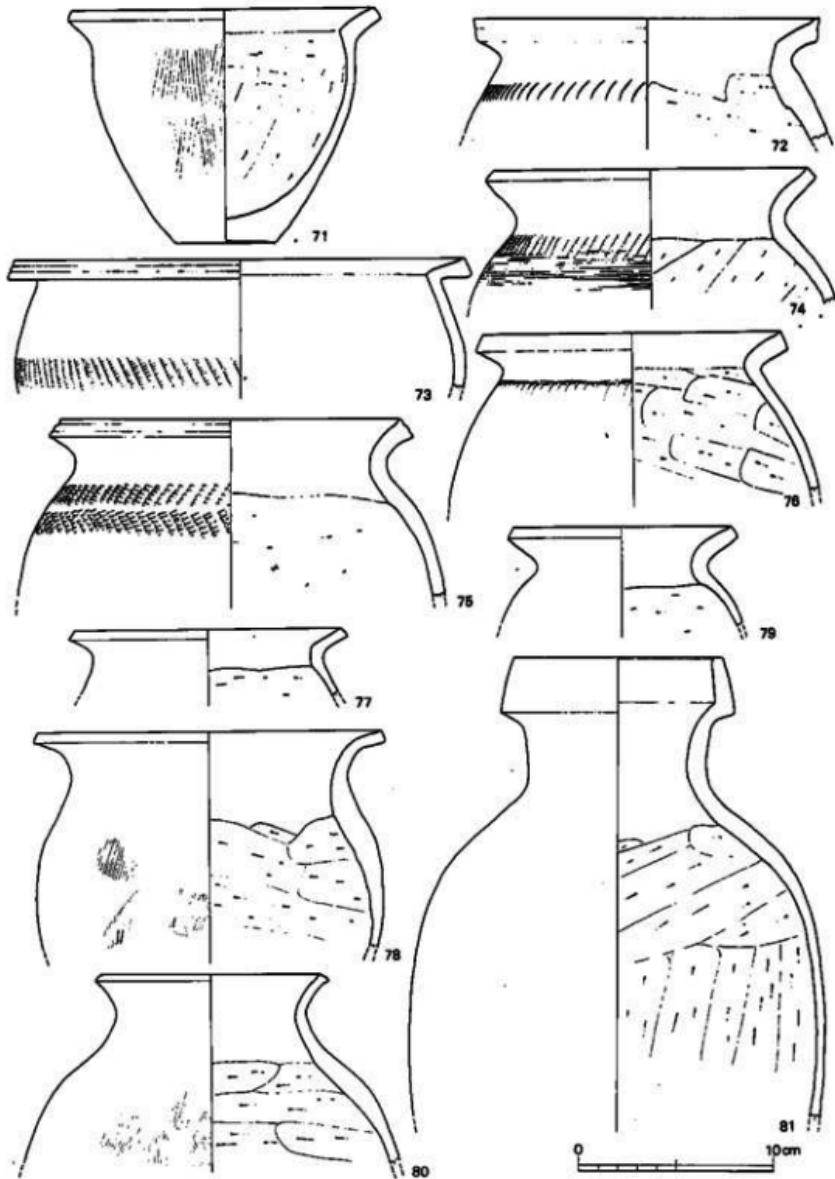
第1-30図 畠谷遺跡B地点出土土器実測図 (1:3)

#### 變形土器 (71~78)

71は器高 18 cm、口径 15 cm、胴部最大径 13.5 cm を計る。肩の張らない小形の壺である。口縁部内外面はナデ、胴部外面はハケ、内面はヘラ削り調整される。72の口縁部外側は斜め上方に拡張し、横ナデ調整される。外面肩部にはヘラ先による「ノ」の字状の刺突文が施される。73は水平に近く外反した口縁をもつ。口縁端部には2条の退化凹線が廻る。胴部外側にはヘラ先による押圧が文様風に廻る。全体の調整はナデ。74は頸部直下にヘラ先による押圧文があり、下位においては横ハケにより消されている。75の肩部には櫛歯状工具による刺突文が施される。胴部内面はヘラ削りの上を横にナデ。76の頸部直下はヘラ先による浅い押圧が廻る。胴部外面はナデ、内面はヘラ削り。77は器壁が薄く、口縁部内外面共横ナデ、78は丸く外反する口縁の土器で全体に摩滅が著しいが、口縁部はナデ、胴部外面はハケ調整と思われる。内面はヘラ削り。

#### 壺形土器 (79~81)

79の口縁部は内外面横ナデ。胴部外面はナデ。80は口縁内外面はナデ。胴部外面はハケ調整であるが風化が著しい。81は内傾する複合口縁をもつ長胴の器形で赤褐色を呈する。外面はナデ、内面はヘラ削り。



第1-31図 叠谷遺跡B地点貝塚出土土器実測図 (1:3)

### 3. C 地点（第 1-32 図）

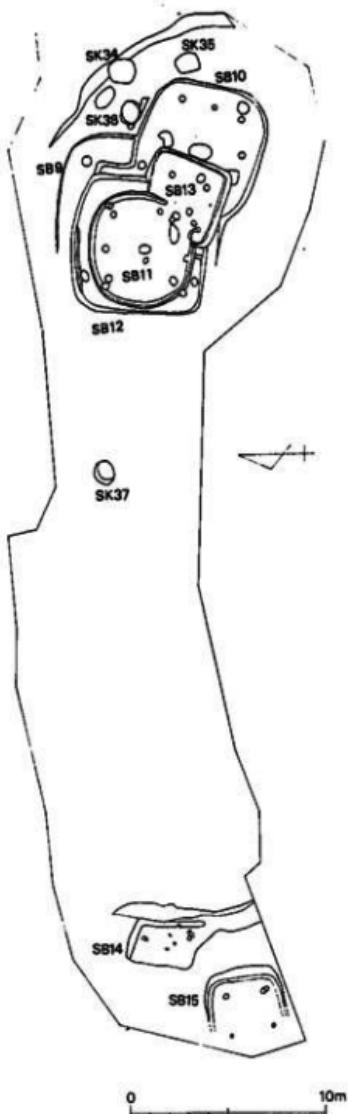
C 地点では住居跡 7 (SB 9~15), 土壙 4 (SK 34~37) を検出した。

C 地点東端部では住居跡 5 (SB 9~13) が切合いながら存在した。調査区中央部は近年の植林のために旧地形の改変があり、SK 37 を除いては遺構は確認されなかった。最西部は貝塚となっていたが貝層の下から住居跡 2 (SB 14・15) を検出した。貝塚からは貝に混って大量の弥生時代後期から古墳時代にかけての土器が出土した。

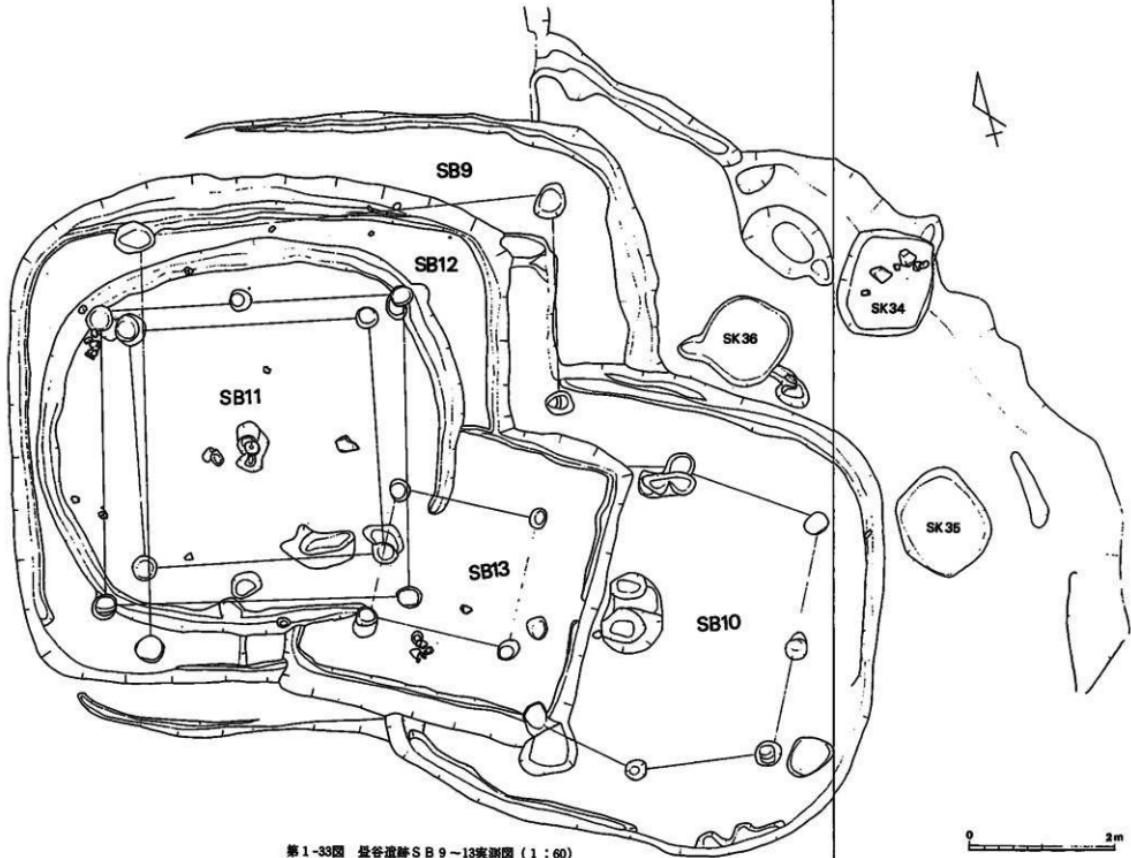
#### SB 9 (第 1-33, 34 図)

SB 9~13 は複雑に重複して検出した。

SB 9 は北東部の壁及び壁溝、柱穴と南側の壁溝が部分的に遺存するだけで、大部分は SB 10 以下の住居跡に切られている。SB 9 の平面形は隅丸方形で、規模は 1 辺約 8.3 m の大形の住居跡になると推定される。住居壁は現存最大高が約 20 cm であるが、ほとんどの部分は壁溝に至るまで削平されている。柱穴は床面東南隅で 1 本を検出しているが、SB 10 の床面の北西隅部にある浅い柱穴も SB 9 に伴うものであり、SB 12 床面の北西隅と南西隅の 2 本も SB 9 のものであろう。



第 1-32 図 畠谷遺跡 C 地点遺構  
配置図 (1 : 300)



第1-33図 叠谷遺跡 S B 9～13施設図 (1 : 60)

#### S B 10 (第 1-33, 34 図)

S B 10 は S B 9 の南部を切って構築された住居跡で、1 辺約 6.3 m の隅丸方形住居跡であり、西側は S B 11~13 の住居跡に切られている。壁高約 50~30 cm で、壁溝は南西隅部を除き全体に廻っている。柱穴の配置は床面周辺の壁近くの部位に 8~9 本が廻ると想定される。S B 13 に切られた部分を除いては 6 本が検出できたが、北西部の 1 本は S B 9 に伴うものと思われ、S B 10 の柱穴の想定配置線とは異なるものである床面中央には赤く焼き固められた炉跡を検出した。

#### S B 11 (第 1-33, 34 図)

S B 11 は S B 9・10 を切る S B 12 の床面中にある径約 5.3 m の円形住居跡である。現存壁高は約 10 cm であるが、S B 12 が S B 11 埋没後に上位に構築されているため、本来の壁高ではないと思われる。壁溝は S B 13 と重なり合う部分の南東部を除いては遺存している。S B 13 の床面と同一のレベルであり、壁溝は当初よりこの部分には存在しなかったと思われる。主柱穴は 4 本が約 3.3 m 間隔に正方形に認められる。床面中央部で炉跡を検出した。

#### S B 12 (第 1-33, 34 図)

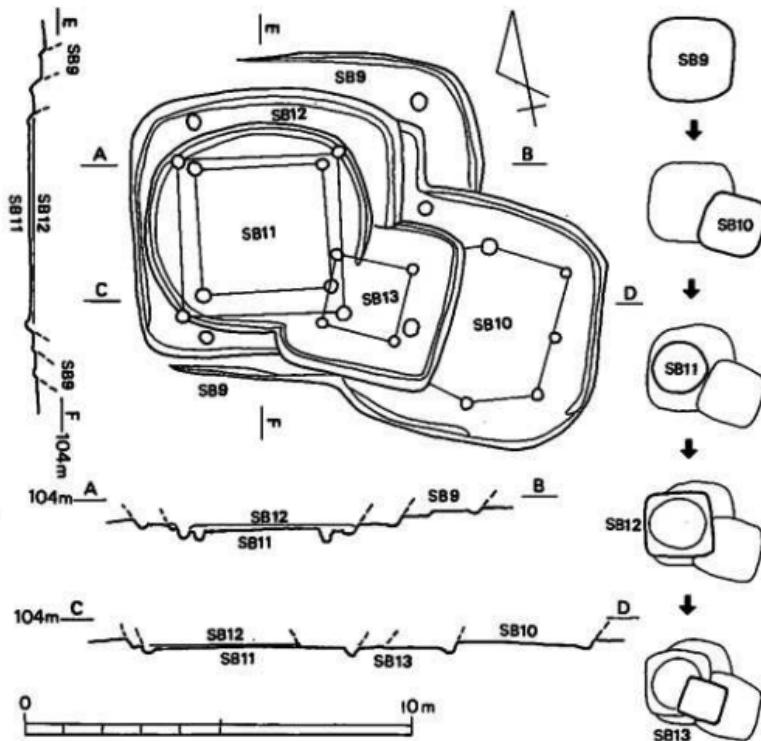
S B 11 の埋没後に同位置に営まれた方形住居跡であり、1 辺約 6.9 m の規模である。東南部は S B 13 に切られている。壁高は約 50 cm で、壁溝は S B 13 に切られた部分及び南西隅を除き遺存する。柱穴は約 4.15 m 間隔で検出し、四本柱の上屋構造が想定されるが、東西辺の中間には各 1 の柱穴があり、6 本柱の可能性もある。炉跡は S B 11 埋土上面に炭が分散してみられるだけで位置を特定することはできなかった。

#### S B 13 (第 1-33, 34 図)

S B 13 は S B 12 を切る 1 辺約 4 m の小形方形住居跡で、S B 11 と同じ床面のレベルまで堀下げられている。壁高は最大約 40 cm である。北西部の壁は S B 11・12 の埋土中に作られていて堆積土の性質がほぼ単一の花崗岩風化土壌のため明らかに出来なかった。柱穴は 4 本が間隔約 2 m で正方形に配置されている。炉跡は検出で

きなかった。

SB 9から13の住居跡の新旧関係はSB 9から10, 11, 12, 13という順に造営されたと推定されるが、北東部のSK34~36については明確ではない。また、SB 9の床に一部、落込みが認められるが、独立した住居跡とは考え難く、むしろ「ベッド状遺構」と呼称される壁沿いに一段高くなった床構造であって、SB 9がそのベッド状遺構を持つ住居跡と考える方が理解しやすい。



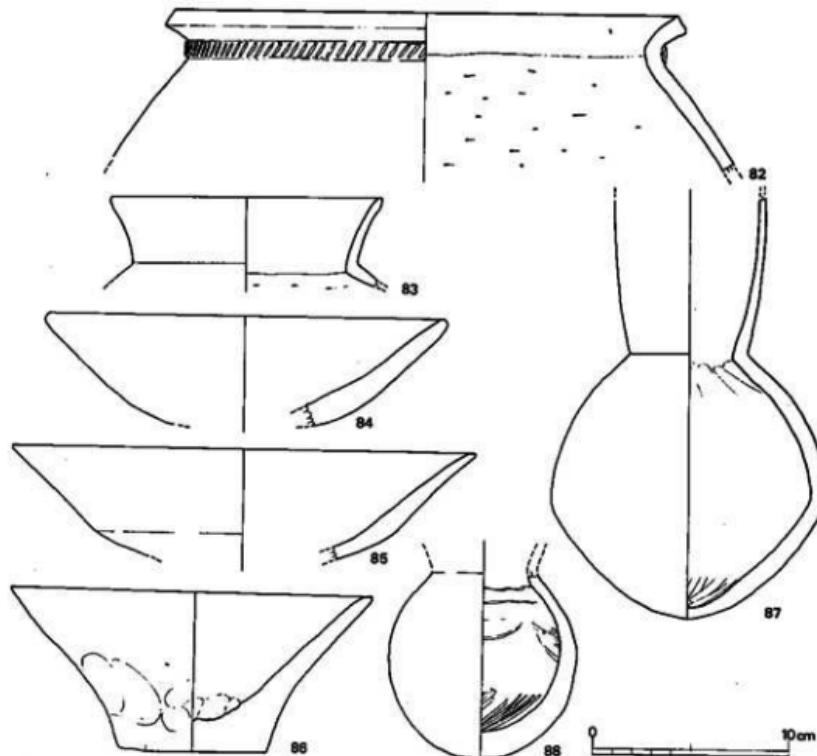
第1-34図 叠谷遺跡SB 9~13の新旧関係図 (1:150)

### S B 9～13 出土土器（第 1-35 図）

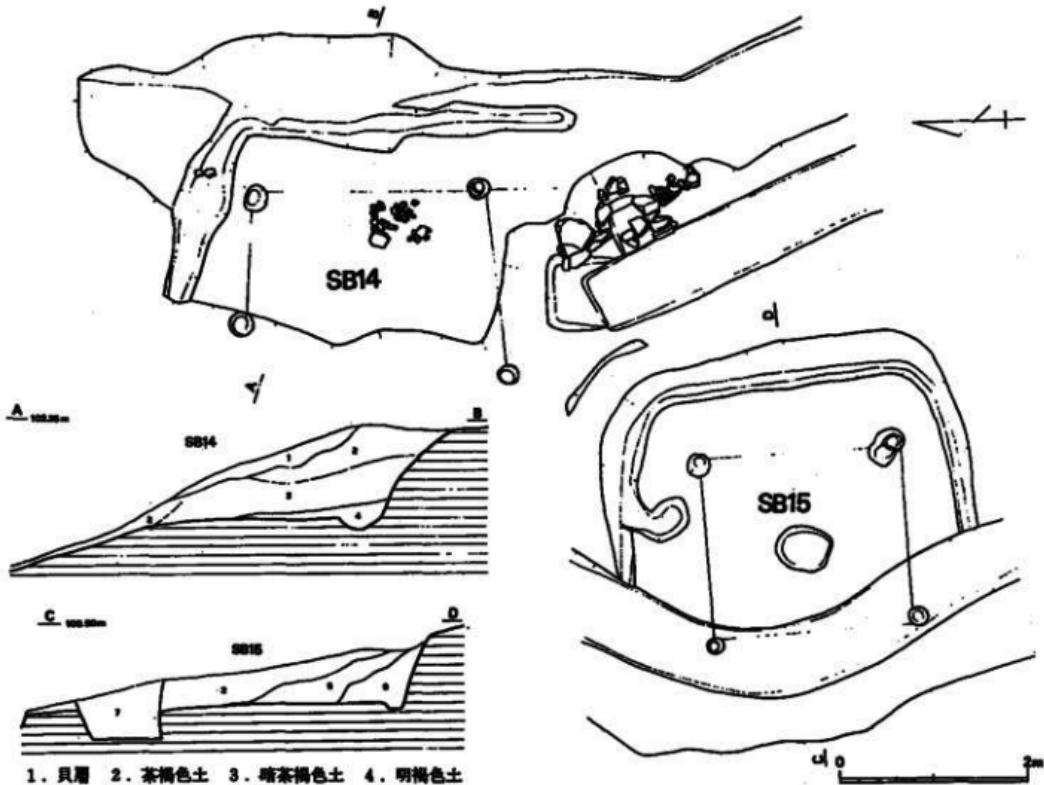
S B 9～13 は複雑に切合っていて、埋土中から出土の土器も各住居跡の出土遺物としてとらえることが不可能に近かった。土器は 82・86 の弥生時代後期前半の時期のもの、83～85 の弥生時代から古墳時代にかけての時期のもの、87・88 の古墳時代初頭の時期の三期に大別される。

### S B 11 出土管玉（図版 21）

S B 11 の北東部壁溝より出土した凝灰岩製の管玉で、長さ 1.6 cm、径 0.2 cm、孔径 0.12 cm を測る。片側より穿孔され、色は明緑色を呈す。



第 1-35 図 畠谷遺跡 S B 9～13 出土土器実測図 (1 : 3)



1. 贝层
2. 茶褐色土
3. 暗茶褐色土
4. 明褐色土
5. 暗褐色土
6. 暗黑褐色土
7. 混乱土

第1-36图 叠谷造SBB14-15实测图 (1:60)

## 貝塚

貝塚はSB 14・15が埋没した後に丘陵上位の成員によって廃棄されたカキ、アサリ、ハマグリなどからなり、大量の弥生時代後期から古墳時代にかけての土器が含まれていた。

### SB 14（第1-36図）

SB 14は丘陵尾根線西斜面にテラス状に掘られた方形の住居跡で、西側床面及び南側は削り取られている。規模は南北が約3.5m以上で、現存床長が約2mである。壁高は最大約90cmで壁溝は北東部に遺存する。柱穴は4本検出しているが、南側の削平された部分にも存在した可能性がある。炉跡は検出できなかったが、小砾の集中する部位があり、その近辺に存在した疑いがある。

### SB 15（第1-36図）

SB 15はSB 14の南側下位にある方形住居跡で、SB 14と同様に斜面に掘られているため西側部分は流れている。規模は南北約4mで東西辺もほぼ同様な数値になると思われる。壁高は最大約80cmで壁溝も良好に遺存する。主柱穴は4本あり正方形にならんでいる。各柱の間隔は約2mである。床面中央には炉跡と思われる浅い小土壇を検出した。

SB 14、15ともに埋土中より弥生時代後期の土器と思われる小片が出土したが、図示できるものはなかった。

## 貝塚出土の土器（第1-37、38図）

### 變形土器（89-101）

89は直角に屈曲し外反する口縁と肩の張らない胴部を持つもので、口縁端部には3条の凹線が廻る。胴部外面はナデ、内面はヘラ磨き調整が行なわれ弥生時代中期末と思われる。90・91の肩部にはヘラ先による刺突文が施される。91は器表の風化が著しいが、内面はヘラ削りであろう。93は極めて遺存状態の良好な完形土器で、器高22

cm、口径 16 cm、胴部最大径 16.5 cm を測り、明赤褐色を呈する。口縁内外面及び胴部外面はナデ、胴部内面は頸部以下ヘラ削り。94 は頸部以上が直立気味に立ち上り口縁端部近くでゆるやかに外反する口縁部に特徴がある。口縁内外面はハケ目が残る。口縁内面はハケの上をナデて仕上げる。胴部外面にはナデの下にハケ目が残っている。95・96・98 は「く」の字に外反する単純口縁のもので、口縁及び胴部外面は總てナデによる調整で、胴部内面はヘラ削り。97 は口縁部が屈曲せずにゆるやかに外反している。口縁内外面及び胴部外面はナデである。99 は外面にペラ磨きが施される。100, 101 は口縁部横ナデ調整であり、胴部外面はナデ、内面はヘラ削り、101 の頸部は浅い段状になっている。

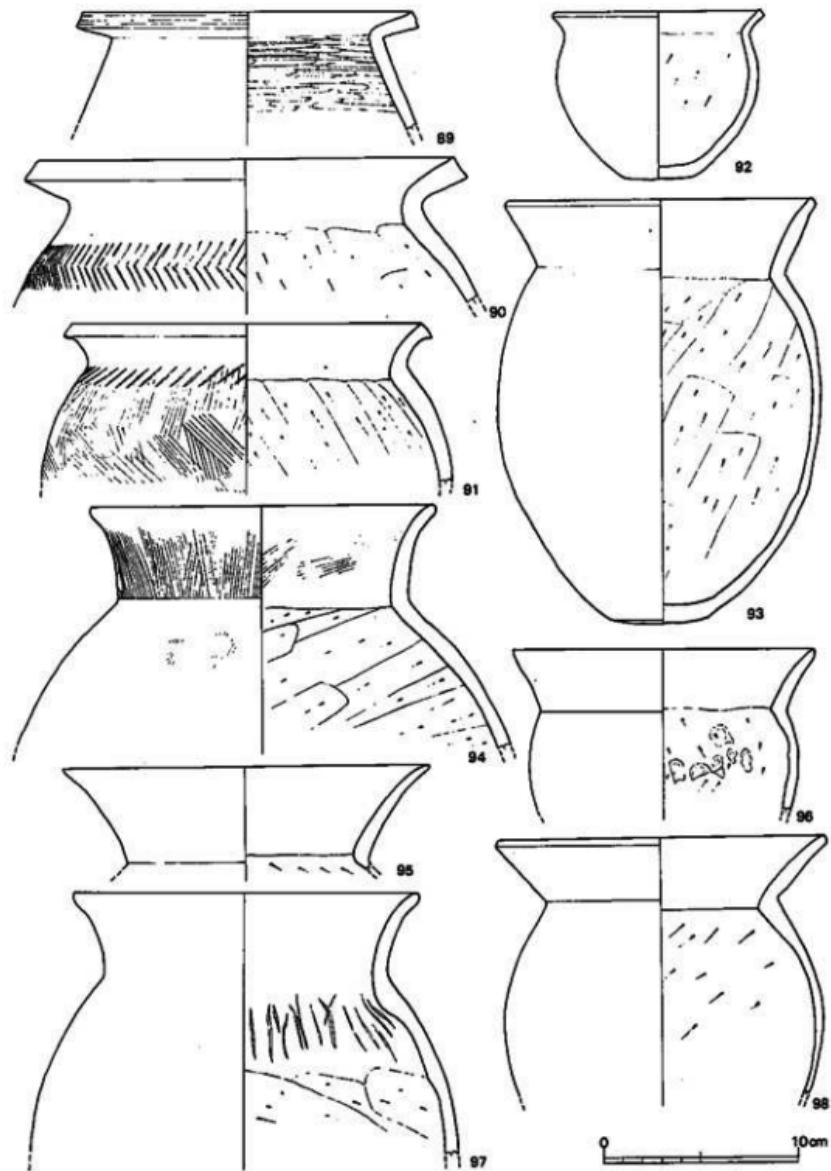
#### 壺形土器 (102, 103)

102 は胴部が完全に球形に形造られていて、短かい口縁がわずかに外反して付される。底部は極くわずかに平底となっている。胴部外面はナデ、内面はヘラ削り。口縁部はハケの上をナデて仕上げていると思われる。頸部にもハケ目状の調整痕が廻っている。103 は長頸壺と思われる。胴部は球形で外面はペラ磨き、内面は指頭押圧による調整である。口縁部内面には輪積痕が残る。

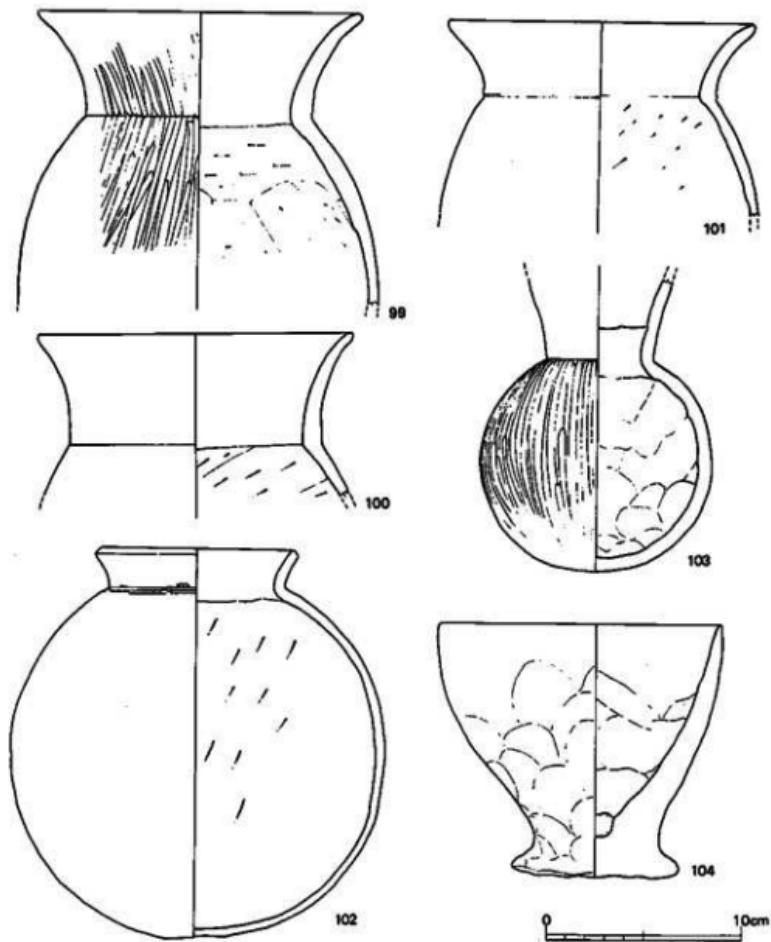
#### 鉢形土器 (104)

製塙土器を思わせる器形であるが確証はない。手づくねで形成されている。

貝塚出土の土器は 3 期に大別される。89 は弥生時代中期末、90~92 は弥生時代後期の土器と思われる。93~101 は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期と推定され、102, 103 は古墳時代に入ってからの土器である。104 は時期が不明確である。



第1-37図 映谷遺跡C地点貝塚出土土器実測図(1)(1:3)



第1-38図 叠谷遺跡C地点貝塚出土土器実測図(2)(1:3)

#### (4) ま と め

以上のように疊谷遺跡からは住居跡15軒、土壙22基、壺棺1基、貝塚3ヵ所を検出し、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落であることが明らかになった。この調査が行なわれた昭和48年の時点では、県内ではこの様な大規模な集落遺跡の調査例は無く、更に立地が標高100~110mの高所にある事から、弥生時代後期の瀬戸内海沿岸地域一帯における高地性集落の出現の問題とからめ、内外から強い関心が寄せられた。

しかしそれ以降、各種開発事業の増加に伴って疊谷遺跡と同様の時期、立地、規模の集落遺跡が数多く調査され、特に広島湾岸では数多くの遺跡が知られるようになつた。このため疊谷遺跡の立地が少なくとも広島湾岸地域において特異なものではない事が判明した（第1-39図）。



第1-39図 広島湾岸地域の弥生時代～古墳時代の貝塚・集落遺跡の分布

## 1. 畠谷遺跡出土土器の編年（第1-40図）

畠谷遺跡出土土器の時期は大別して弥生時代中期終末、後期前葉、中葉、後葉、及び弥生時代から古墳時代への移行期、古墳時代初頭の6時期に分けられる。

しかし、広島湾岸における弥生時代後期の土器の様相の特質として、變形ないしは壺形の器種のみを取り上げても、胴部外面がナデあるいはハケ調整、胴部内面がヘラ削りという通有な技法に立ちながら、器形の細部については各遺跡単位により異なりを見せることがあげられ、細分化は著しく困難である。また、弥生時代後葉から古墳時代にかけての時期には、山陰地方、北九州並びに周防の西部瀬戸内、畿内地方などの土器製作技法の影響と、在地性の強い持続が顕在し、混沌たる様相を呈する上、この時期においては、湾岸の各小水系毎について土器様相の異なりも認められるようであるが、資料の内容及び絶対量が不足し、充分な検討が加えられてはいない。

このような広島湾岸の土器様相の特質を認識すると、提示した畠谷遺跡出土土器の編年案は、温品川水系の一遺跡中におけるものとして理解されなければならず、他遺跡のそれと異なる事は必然的に起きうる可能性がある。そのため将来的には他遺跡出土のものを合わせ、総合的な編年が確立されねばならない事は言うまでもない。

なお、本文中においては記述の都合上、器種選別を行っているが、壺形、變形の区別がつき難い器形が多いため、ここでは器種を細分していない。

畠谷遺跡出土の総量のうち、最も多いものは弥生時代後期中葉から古墳時代初頭にかけての時期の土器である。すなわち遺跡の中心年代もその時期内にある。

弥生時代中期終末の土器は少量ではあるが、貝塚中やSK32から出土した。口縁部は水平に近く外反し、胴部内面はヘラ磨きあるいはナデで調整される。

弥生時代後期前葉と思われる82は、後期前葉でも古相を示すものと言えよう。同時期の土器は少ないながら貝塚より出土している。

弥生時代後期中葉、後葉の厳然たる時期区分は困難ではあるが、凹線文や、二枚貝腹縁、ヘラ先による刺突文などの文様が施される土器から無文化への傾向がうかがえる。また、拡張された口縁部や、底部の平坦面の器高に対する比率の大きさも古相の土器の特徴である。2の斜上方に外反する口縁端部を持つ土器は、器形的には新相を示す要素を持つが、明瞭な凹線文が付される事と一点のみの出土で類似したものが本

遺跡中に認められないため、中葉よりやや下る時期とした。29, 81 の複合口縁の土器は、装飾文様が 29 に 1 条の波状文が認められるだけであり、より新しい編年位置を与える可能性を持つが、底部の形状等が不明であり、ここでは 29 と同じ住居跡(SB 3) の伴出土器の様相からやや古く位置づけた。手づくね土器 20, 21, 22 等は、広島県東部以東では古墳時代の土器として出土した例があるが、ここでは出土した住居跡の伴出遺物の時期から見て、やはり古い時期に比定した。

弥生時代から古墳時代にかけての時期については単に土器だけでなく弥生時代と古墳時代の時代区分も関係して多くの問題が内包されている。

そのためにここでは明瞭な一線を本遺跡出土土器編年案に画す事を避けるが、この場合、弥生時代から古墳時代にかけての時期に比定した土器は、畿内の庄内式土器、東部瀬戸内の酒津式土器、山陰地方の鍵尾II式土器に並行するものであり、古墳時代開始後の土器として位置づけたものは、畿内の布留I式土器、東部瀬戸内の亀川上層式土器、山陰の小谷式土器に並行するものと考えている。

庄内式土器や酒津式土器に並行する時期の土器と考える 93, 99 は外反する単純口縁を持ち、底部は小さな平底を残すものであるが、広島湾岸の他の水系には同様な器形の丸底の土器も多く見られる。この差異は時期差というよりはむしろ地域差としてとらえられよう。87 のような丸底長頸壺も、この時期の広島湾岸にはしばしば認められる。

古墳時代以降の土器として編年されている土器は、長い口縁部をもつ 36、球形の胴部の 102、高杯など、布留I式期土器との共通の器形を示す。35 は搬入品（広島以東よりの）である。手づくねにより形成された 38, 43 などは、在地色の色濃い土器であるが、畿内布留式土器の器形の影響も強い。

土器型式による編年は以上であるが、この中で SB 1 出土の土器がかなりの年代幅を持っている事が知られる。ただ、二型式以上の土器が住居内で認められるという事は、素焼土器生産の恒常性を考えるとむしろ当然おこりうる必然であり、一型式土器の 1 遺構内一括出土はまれなものと思われる。

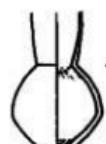
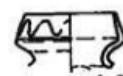
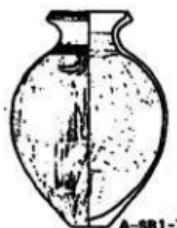
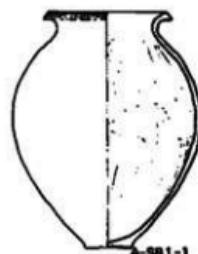
弥生時代中期末

前業

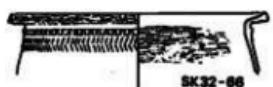
弥生時代後期

後業

古墳時代初頭



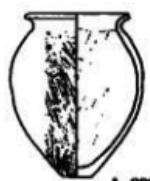
第1-40図 畠谷遺跡出土土器編年表 (1:9)



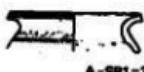
B-S-73



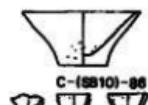
C-(SB9)-82



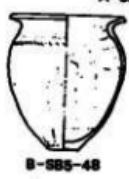
B-S-71



A-SB1-3



A-SB1-20, 21, 22



A-SB1-14



A-SB1-4



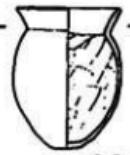
A-SB1-23



B-SB5-53



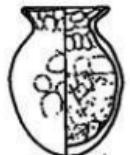
C-S-79



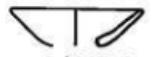
C-S-93



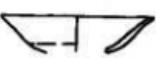
C-S-90



A-SX16-38



C-(SB13)-84



C-(SB13)-85



A-SX16-43

豊谷遺跡検出住居跡一覧

番号	平面形	規模(m)	柱穴配置	炉跡	備考
SB1	円形	長径約5.3 短径約3.5	4本柱	有?	弥生土器多量に出土
SB2	隅丸方形	長辺約4.5 短辺約4.1	6本柱	無	建替え(拡張)される
SB3	円形	径約5.5	4本柱	有	貯藏穴あり
SB4	円形	径約5.3	4本柱	無	副柱穴多数検出
SB5	円形	径約8.8	多柱穴 (円弧状)	無	SB6より新 SB7より古
SB6	円形	径約3.5	4本柱	有	SB5より古
SB7	円形	径約8以上	多柱穴	無	SB5、8より古
SB8	円形	径約4.5	4本柱	有	焼失家屋(炭化材検出) SB7より新
SB9	隅丸方形	一辺約8.3	不明 (円弧状か)	不明	ベッド状造構あり? SB9~13群中最古
SB10	隅丸方形	一辺約6.3	多柱穴 (円弧状)	有	SB9より新
SB11	円形	径約5.3	4本柱	有	SB10より新
SB12	方形	1辺約6.9	4本柱 (6本?)	不明	SB11より新
SB13	方形	一辺約4	4本柱	無	SB9~13群中最古
SB14	方形	南北3.5以上 東西2以上	4本以上	有?	C地点貝塚下面
SB15	方形	一辺約4	4本柱	有	"

## 2. 各住居跡の時期決定

前述の土器型式編年による各住居跡出土土器の照合、及び表で示した各住居跡の各々の切合関係による新旧決定によって各時期は以下の様にとらえられる。

- |                  |                         |
|------------------|-------------------------|
| 1. 弥生時代中期終末      | — SB 9・14・15            |
| 2. 弥生時代後期中葉      | — SB 1・4・6・7・10 (SP 38) |
| 3. " 後葉          | — SB 2・3・5・8・11         |
| 4. 弥生時代終末～古墳時代初頭 | — SB 12 (SK 28・29)      |
| 5. 古墳時代初頭        | — SB 13 (SX 16)         |

## 3. 集落構成の変容（第1-41図）

以上のように各遺構の時期を推定したが、各小期の集落内構成の様相については第1-41図の如き遺構配置となろう。もちろん、本来の集落構成はこのように図式的になるものではなく、各期の前後が重複して現われる事は念頭に置かねばならない。また、C地点中央部は植林のために大幅な削平が行われていて住居跡が消滅した可能性があり、SB 9～13の住居跡は単独の存在ではないかもしれない。

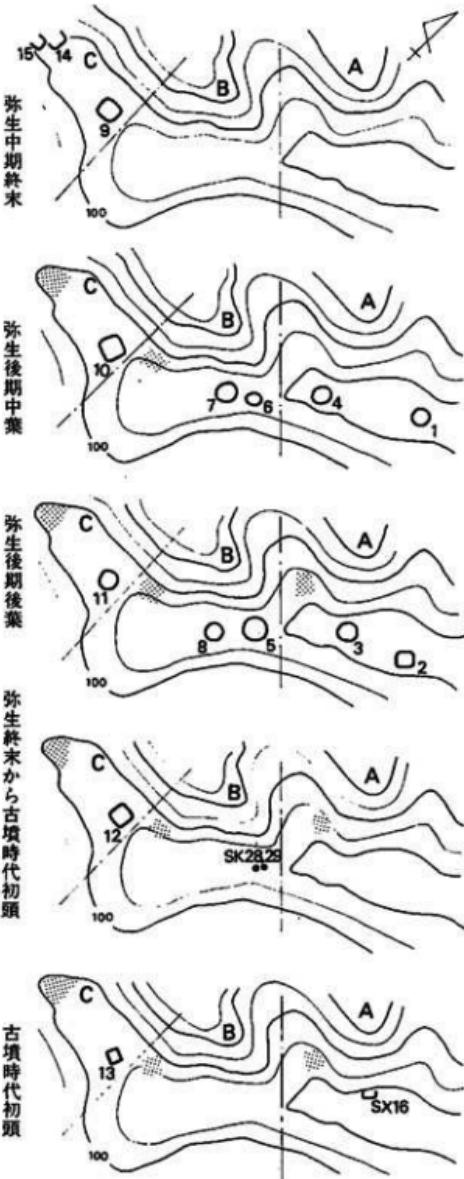
この第1-41図の様に各期について集落を分割していくと、そこには各地点における2棟1単位の小グループの存在が推定されよう。すなわち弥生時代前期のC地点ではSB 14, 15のグループ、SB 9+αのグループが抽出され、後期中葉～後葉の前段階ではA地点のSB 1, 4のグループ、B地点のSB 6, 7のグループ、C地点のSB 10+αのグループが存在し、その次の段階では、A地点のSB 2, 3のグループ、B地点のSB 5, 8のグループ、C地点のSB 11+αのグループが認められよう。弥生時代から古墳時代にかけてはC地点のSB 12+αのグループのみが抽出されるが、B地点ではSK 28, 29のような遺構もある。古墳時代に入ってもC地点のSB 13+αのグループのみが抽出されるが、A地点のSX 16やSB 3埋没土上層には、この時期の土器の出土があり、何等かの営みが行われていたと思われる。

これらの小グループの配置は、3地点の各々の平坦面に分かれている、各々の領域に貝塚を築いた状況が看取される。SB 14, 15のグループについてはC地点の最西部

の斜面に位置しているため、別の領域を想定する必要も認められる。

さて、この様に見えていくと疊谷の集落は2棟を基本的な単位とする小グループによって成り立っている事が明らかとなった。そして弥生時代後期の中葉から後葉にかけて、集落は最盛期を迎える3グループ組成により成る $5+a$ 棟の数の住居が営まれたのであろう。

集落内の各小グループの構成の成因については明確でない。あるいは血縁的紐帶のより強固なグループであるかもしれないが、今後検討が必要とされよう。



第1-41図 疊谷遺跡集落構成の変化 (1 : 2,500)  
(アミ目は貝塚)

## 倉重古墳

- (1) 位置と環境
- (2) 古墳の概要
  - 1. 現状
  - 2. 墳丘
  - 3. 横穴式石室
  - 4. 出土遺物
- (3) まとめ

## (1) 位置と環境(第2-1図)

広島湾岸は太田川のデルタ地帯を除くと広い平地がなく、わずかに湾に注込む中小河川によって出来た小平地が点在するのみである。五日市町も南流する八幡川下流域に小平地が見られるものの古代においては現在より海岸線が入り込んでいたと考えられ、現在より平地は狭かったものと考えられる。このことは原始～中世にかけての遺跡のほとんどが丘陵上及びその裾に点在していることからも窺い知ることが出来る。五日市町内では現在110ヵ所の遺跡が確認されているが調査されたものは少なく今後の調査に待つところ大である。また、高度経済成長期以降のベッドタウン化も著しく既に失せた遺跡も少なくない。

弥生時代においては、中期以降の土器が數ヵ所で発見されており、集落の存在を予想させるものの明らかでない。丘陵上に位置する寺山遺跡で円形の住居跡1軒が調査されているのみで、これは後期に比定されている。おそらく集落は低丘陵上に存在したものと考えられる。この時代の墳墓としては高井墳墓群で箱式石棺と壺棺が確認されており、後期に比定されている。丘陵上に営まれ、数基から成る集団墓と考えられる。また、寺山、用免山でも箱式石棺が発見されているが、出土遺物がなく、弥生時代、あるいは古墳時代のいずれに属するのか明らかでない。

古墳時代においては、前半期に属する古墳で明確なものはないが、高井付近から出土したと伝えられる仿製神獸鏡が存在している。付近にこの鏡を有した古墳が存在したのであろうか。後半期になると倉重古墳をはじめとして横穴式石室が築かれている。内容の明らかな三宅古墳からは須恵器をはじめとして玉類・鉄製品等が多く出土しており、6世紀後半に比定されている。他は調査されていないが、単独に存在する古墳が多い中で原古墳群は4基(以上)から成り、群を形成している。

五日の古墳は採集された遺物からみても6世紀後半から7世紀前半に比定されるものがほとんどであり古墳時代前半期に時期的な断絶がみられる。今後調査を進めるなかでこうした時期的断絶について調査し埋めていく必要がある。

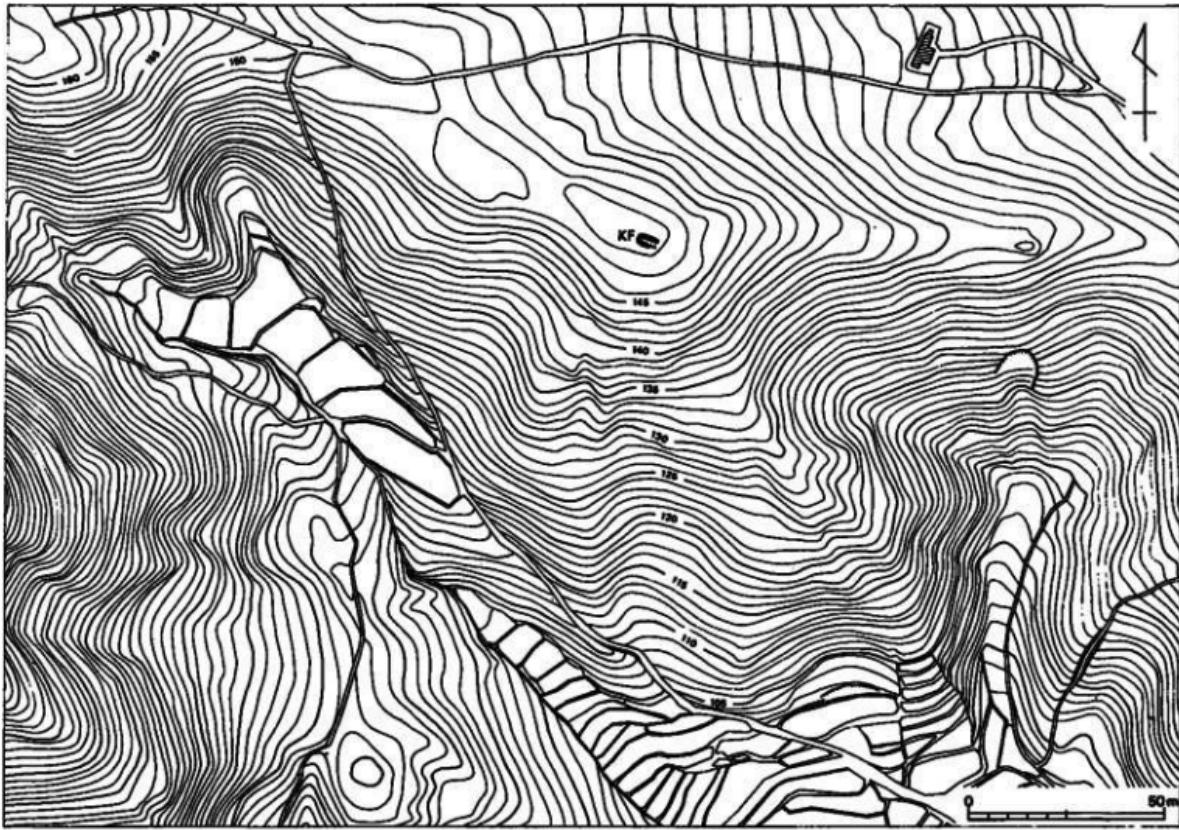
### 参考文献

五日市町誌編纂委員会「五日市町のあけぼの」「五日市町誌」上巻 1974年

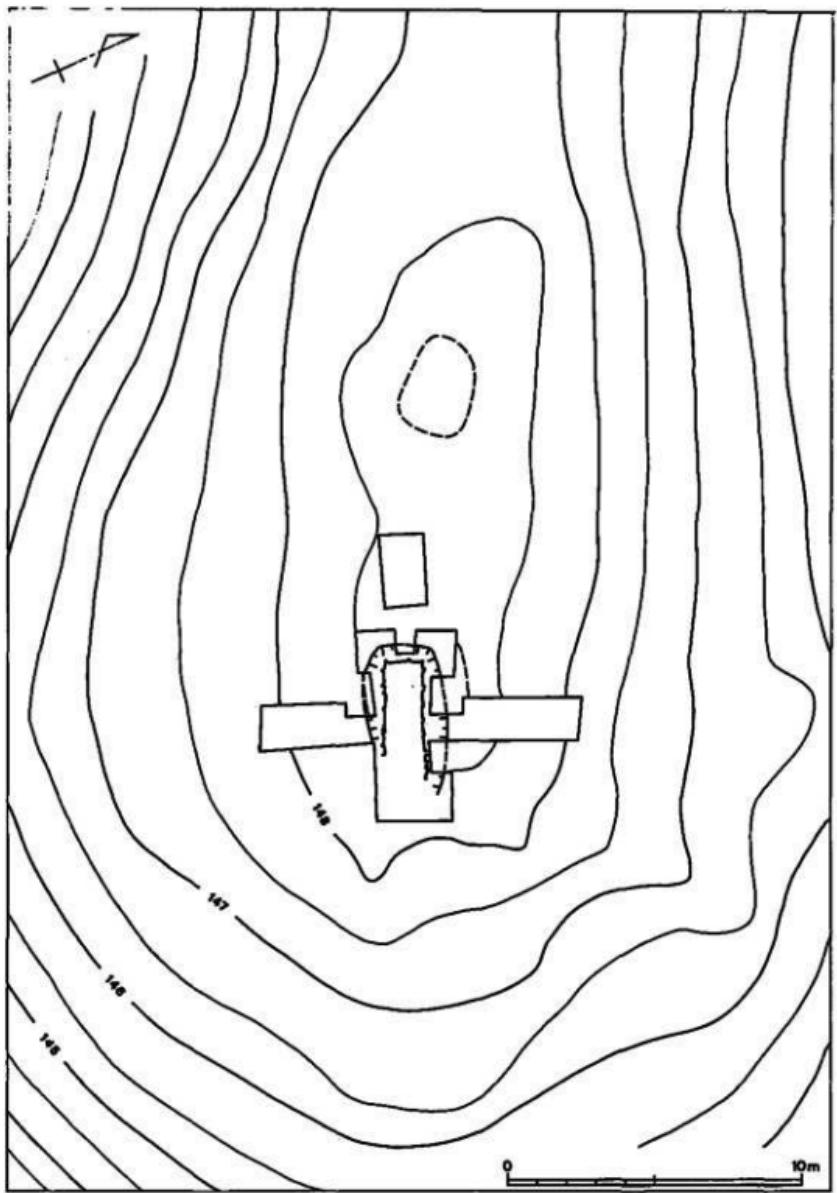


第2-1図 五日市町周辺古墳分布図 (1:50,000)

- |           |              |
|-----------|--------------|
| 1. 上沖古墳   | 7. 寺山箱式石棺    |
| 2. 高井箱式石棺 | 8. 坪井公民館裏古墳  |
| 3. 寺田古墳   | 9. 三宅古墳      |
| 4. 翠が原古墳群 | 10. 三宅ゴルフ場古墳 |
| 5. 荣草原古墳  | 11. 用免山箱式石棺  |
| 6. 倉重古墳   |              |



第2-2図 倉重古墳周辺地形図 (1:1,500)



第2-3図 倉重古墳調査区及び造構配置図 (1 : 200)

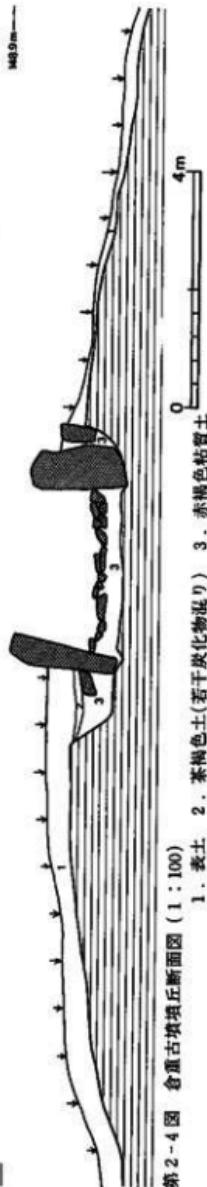
## (2) 古墳の概要

### 1. 現状（第2-2図）

古墳は丘陵尾根の先端部に位置し、標高148.8m、眼下の水田面との比高差は約64mである。調査前においては山林で、墳丘盛土はほとんど流失し、石室も天井石は残っておらず一部側石が露出していた。

### 2. 墳丘（第2-3・4図）

古墳は丘陵頂部の高まりを利用してつくられたものと考えられる。しかし、石室を中心に十字に調査区を設けて墳裾の確認を行ったにもかかわらずそれを明らかにすることはできなかつた。土層断面も黄褐色を呈する地山上に表土である灰褐色土が厚さ約10~40cm見られるのみであった。つまり墳丘を築成するための地山の切削加工、堀削、盛土は確認することができなかつた。しかし、本古墳の背面にも高まりが存在し、本古墳との間が鞍部状になることを考えれば、一応この間に裾を求めることができよう。前面については、石室の前庭部に大形の角礫4個を中心とした礫群が存在することから、これが墳端と考えられる。以上のように本古墳は旧自然地形を利用し、ほとんど加工を加えず築造されたもので、この場合の墳丘規模は径約11m、高さ2m（現状）以上と考えられる。



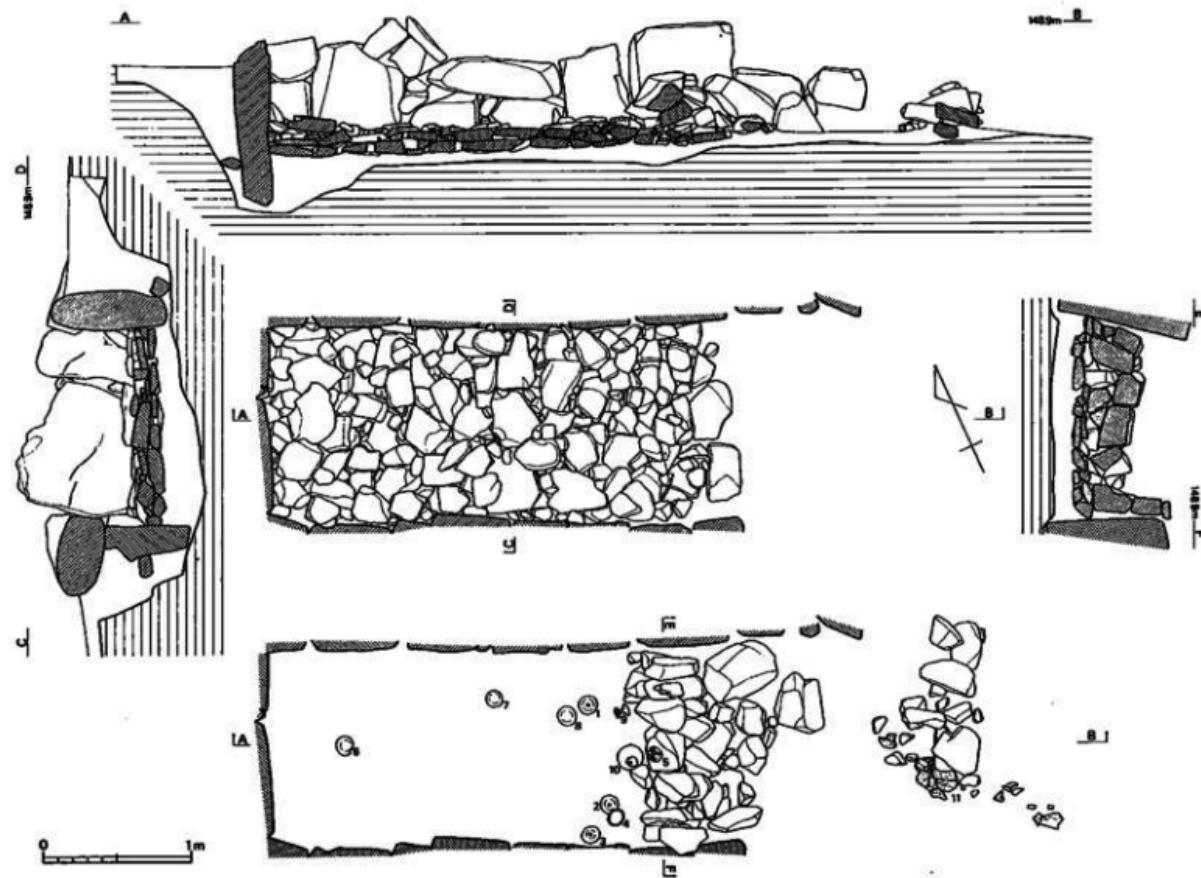
第2-4図 令賀古墳墳丘断面図 (1:100)  
1. 表土 2. 茶褐色土(若干炭化物混り) 3. 赤褐色粘質土

### 3. 横穴式石室（第2—5図）

石室は、丘陵頂部に長軸 N65°30'W の方向でコ字状に地山を幅約 2.5 m、深さ約 60 cm 壕込み、その中に築かれている。壙底は平坦でなく、その石材に応じてさらに部分的に掘込まれており、奥壁部では他より約 35 cm 深く掘込まれている。石室の構築は、大形の石材を中心にして小形の石で長さ・高さの調整を行っている。奥壁は正方形に近い 110×95 cm、厚さ 20 cm の平石 1 枚と 70×35 cm の長方形の平石を縦長に使用して 2 枚の石から成っている。側壁は腰石についてみると北壁が 8 個、南壁が 8 個残存していた。しかし、南壁は敷石端までしか残っておらず、敷石端までだと北壁は 6 個で南壁に比べて大形の石を使用している。両側壁とも最奥部は小形石を 2 段に積み北壁で奥より 3・4 番目で 2 段に積んでいる以外は大形の平石を縦長に面積としている。この大形石の上にもさらに小形の石を積み、天井石との間を埋めたものと考えられる。奥壁・側壁の裏側には一部で数層に分かれる平行堆積土層が見られるが、基本的には地山削平土が埋められており、またわずかに裏込めの石も見られるが少ない。床面は赤褐色粘質土を厚さ約 15 cm 埋めて水平面をつくり、その上に一辺 20~40 cm、厚さ 10 cm 前後の平石を基本的には 2 重に積み敷石の床としている。敷石は封鎖石の外縁で終わっており、この端の部分には他より大きめの石を用いている。これは当初よりこの部分までしか敷石が存在しなかったことを示すとともに、玄室としての区域をも示すものと考えられる。またこの敷石上には木炭片が全面に敷かれており、敷石間にも入っていた。封鎖石は奥壁から 2.5 m の所より幅 1 m にわたって 2~3 段に積まれている。内側には石室長軸に平行させて長方体の角礫を積み、その外側は乱雑に積まれている。

石室の規模は内法で全長 399 cm (現状)、幅が奥壁で 134 cm、封鎖石部で 135 cm、高さ 80 cm 以上のコ字形を呈する無袖式のものである。

また石室前面、前庭部の礫群は外護列石的なものであろうか。大形の角礫である。出土した遺物は須恵器のみで石室内と石室外（入口？）とに分けられる。石室外では礫群周辺で破碎された壺がほぼ 1 個体分出土しており、墓前祭に伴うものと考えられる。石室内では杯身(6)の出土位置には注意する必要がある。

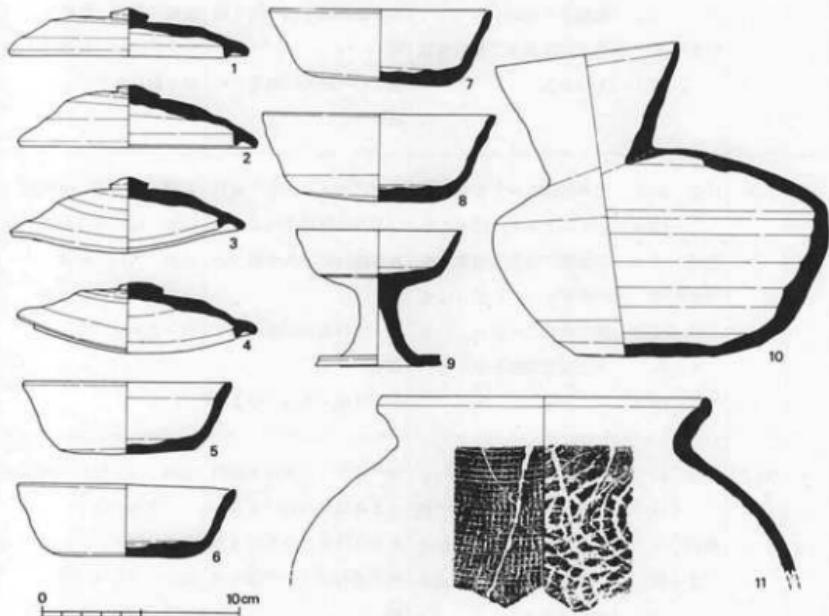


第2-5図 倉重古墳横穴式石室実測図 (1:40)

#### 4. 出土遺物（第2—6図）

須恵器、杯蓋4、杯身4、高杯1、平瓶1、壺1の計11点出土している。全て完形又はほぼ完形品である。

杯蓋は全て扁平な擬宝珠様つまみをもち、かえりの付くものである。杯身は平底を呈し、立上りをもたないので、8は他に比べてやや大形である。高杯は無蓋で小形のものである。杯類は全て焼き歪・膨れがみられる。



第2—6図 倉重古墳出土土器実測図 (1:3)

倉重古墳出土須恵器観察表

番号	器種	法量(cm)	形 態 の 特 徴	成形技法の特徴	備 考
1	杯蓋	口径 10.8 器高 1.8 つまみ径 2.0	全体に扁平で天井部は平らで端部へ丸みをもって下り、端部は丸くおわる。 かえりは垂直で端部と同高	マキアゲ、ミズビキ形成 つまみは貼付けによる 天井部外面はヘラ削り調	色調 内・外・断 青灰 色 胎土 砂粒を含むが、密 焼成 良好、堅緻

		つまみ高 0.7	かやや突出する。つまみは扁平で擬宝珠様を呈する。	他は内外面共に回転ナデ調整	ロクロ回転 右方向 焼き歪あり
2	同上	口径 11.2 器高 2.8 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	天井部は丸みをもちながら下り、端部は丸くおわる。かえりは垂直で端部より低い。 つまみは扁平で擬宝珠様を呈する。	マキアゲ・ミズビキ成形 つまみは貼付けによる かえりはオリコミによる 天井部外面はヘラ削り調整 他は内外面共に回転ナデ調整	色調 内・外 暗灰色 外面がやや黒い 胎土 砂粒を含むが、密 焼成 良好・堅緻 ロクロ回転 右方向 焼き跡あり
3	同上	口径 12.0 ～10.9 器高 2.2 つまみ径 1.9 つまみ高 0.6	天井部は丸みをもちながら下るが、段をなし端部に至る。端部はやや面をもつ。かえりは垂直で端部より低い。つまみは擬宝珠様を呈する。	マキアゲ・ミズビキ成形 つまみは貼付けによる。 天井部外面はヘラ削り調整 他は内外面共に回転ナデ調整 かえりはオリコミによる	色調 内・外 暗灰色 胎土 砂粒を含むが、密 焼成 良好・堅緻 ロクロ回転 右方向 焼き歪あり
4	同上	口径 13.2 ～11.3 器高 1.7 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	天井部は平らで端部へなだらかに下るが中途で段をもち丸くおわる。かえりは垂直で端部と同高かやや突出する。 つまみは4点中最も扁平であるが擬宝珠様を呈する。	マキアゲ・ミズビキ成形 つまみは貼付けによる かえりはオリコミによる 天井部外面はヘラ削り調整 他は内外面共に回転ナデ調整	色調 内・外 やや暗い 青灰色 胎土 密 焼成 良好・堅緻 ロクロ回転 右方向? 焼き歪あり
5	杯身	口径 10.6 器高 3.7	口縁部は外上方にのび端部は丸くおわる。底部との境は明瞭で平底。	マキアゲ・ミズビキ成形 底部外面は回転ヘラ削り、中央部一定方向のヘラ削り調整 他は内外面共に回転ナデ調整	色調 外 黒灰色 内 暗灰色 胎土 砂粒を含むが、密 焼成 良好・堅緻 ロクロ回転 右方向 焼き歪・彫れあり

6	同上	口径 11.2 器高 3.6	口縁部は外上方にのび端部は丸くおわる。底部との境はにぶく平底。	マキアゲ、ミズビキ成形 底部外面の外周は回転ヘラ削り、中央部一定方向のヘラ削り調整 他は内外面共に回転ナデ調整	色調 外 黒灰色～暗灰色 内 灰色 胎土 砂粒を含むが、密 焼成 良好・堅緻 ロクロ回転 右方向 焼き歪・崩れあり
7	同上	口径 11.2 器高 3.9	口縁部は外上方にのび端部は丸くおわる。底部との境はにぶく平底。	マキアゲ・ミズビキ成形 底部外面の外周は回転ヘラ削り、中央部一定方向のヘラ削り調整 他は内外面共に回転ナデ調整	色調 外 黒灰色 内 暗い灰色 胎土 砂粒を含むが、密 焼成 良好・堅緻 ロクロ回転 右方向 焼き歪・崩れあり
8	同上	口径 11.8 器高 4.4	口縁部は外上方にのび端部は丸くおわる。底部との境はにぶく底は平らである。	マキアゲ・ミズビキ成形 底部外面の外周は回転ヘラ削り、中央部一定方向のヘラ削り調整 他は内外面共に回転ナデ調整、仕上げナデあり	色調 内・外 青灰色 胎土 砂粒を含むが、密 焼成 良好・堅緻 ロクロ回転 右方向
9	高杯	杯部口径 8.4 脚部径 6.4 器高 6.9 脚部高 4.0	脚部は外湾ぎみに外下方に下がり、端部でわずかに下方に肥厚し面をもつ。 杯部は外方にのび屈曲して外上方に口縁部はのび、端部は丸くおわる。屈曲部にナデにより生じた沈線がみられる。	マキアゲ・ミズビキ成形 脚部は貼付け 回転ナデ調整	色調 内・外 青灰色 胎土 砂粒を含むが、密 焼成 良好・堅緻 ロクロ方向 右方向
10	平瓶	口径 9.4 器高 15.9 口頸基部径 6.6	口縁部は外上方にのび、端部でわずかに内済し丸くおわる。体部は天井部・口頸部と3段階の貼付けによる丸みをもちわずかに後	マキアゲ・ミズビキ成形 体部・天井部・口頸部と3段階の貼付けによる内外面共に回転ナデ調整	色調 外 白っぽい灰色 一部黒灰色 内 黑灰色 胎土 砂粒を含むが、密

		体部最大径 17.1 底部径 7.2	をなして底部となる。底 部は平ら。	底部回転ヘラ削り調整	焼成 良好・堅緻 ロクロ回転 右方向
11	甕	口径 17.0	体部は丸みをもち、頸部 はく字状に外反し、外上 方に口縁部はのび端部は 丸くおわるが内傾し内面 が凹む。	口縁部回転ナヂ調整 体部外面平行タタキ、そ の上を粗いハケ調整、内 面円形タタキ調整	色調 内・外 淡灰褐色 胎土 密 焼成 やや軟

### (3) まとめ

本古墳は丘陵尾根先端部の高まりをほとんど切削加工することなく利用して、横穴式石室を構築した古墳である。石室は既に天井石が消失しておりその全容は不明であるが、現長399cm、幅（奥壁）134cm：（封鎖石部）135cmの規模を呈する無袖式の横穴式石室である。

石室の構築法は、両側壁とも大形の石材を使用しほば同じ積み方をしている。まず奥壁を据えると共に北側壁は6番目の腰石（奥壁部より数える。以下同じ）を、南側壁は8番目の腰石を各々据えている。この部分は敷石端とも一致し石室規模を定める上で前方部における基本石であったと考えられる。そして玄室・狹道各々の壁が積まれている。両側壁の奥壁に接する部分はともに小形石が2段に積まれている。これ以外では北側壁中間部で2段に積まれているのみで他は全て大形の石を用いて構築されている。奥壁部に接する2段積みは本古墳の石室構築における一つの特徴ともいえよう。

床面は石敷でしかもその上に木炭片が敷かれていた。<sup>(1)</sup>広島湾岸では石敷の石室の例は多いが木炭を敷いた例はなく、また全国的に見ても類例は知らない。木炭層は封鎖石下にも及んでおりこのことから明らかに石室構築時に伴うものと考えられる。石敷は平石を用い平坦面を呈していることから、木炭敷は2次的なものであり追葬時の石室補修とも考えられるが出土遺物は一時期のものしかなくこの可能性は少ない。このことから石敷・木炭敷共に同時期と考えざるを得ない。この機能については現段階では石室内の防湿を意図したものとしか考えられないが、特異な例であり、今後の類例を待って検討したい。

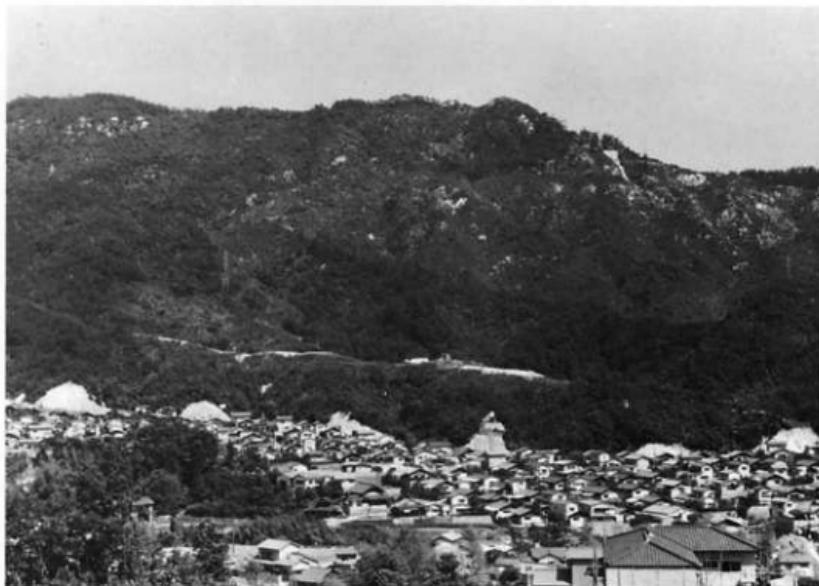
出土遺物は前庭部から墓前祭に伴うと考えられる破碎された須恵器甕と石室内に副葬された須恵器類のみであった。当初から副葬品がこれのみであったかどうかは疑問であるが、他の遺物の細片さえ出土していないこと、床面の遺存状態が良好であったことを考えれば須恵器類のみの副葬であった可能性は高い。またこれらの須恵器から本古墳の時期は7世紀前半の中頃と考えられる。

本古墳の石室はコ字形の平面プランを呈する無袖式のものである。こうした平面コ字形を呈する石室は時期が下ると共にハ字形に開く傾向が認められるが、本石室は全く開かない。県内において横穴式石室の古墳群として比較的まとまり、しかも規模の明らかな広島市安佐北区可部町の給人原古墳群で石室の奥壁部幅に対する開口部幅での比率をみると、6世紀後半の第1・2号古墳は胴張りプランを呈するものの1:1.19であり、6世紀末から7世紀前半の第9~11号古墳は1:1.28~1.4の間であり、7世紀前半以降の第4・6号古墳は1:1.7~2.5の間である。<sup>(2)</sup>このことから上記の傾向は一応首肯されるものの、一方では石室の縮小化とそれに伴う石室幅の減少と関係しているようである。給人原古墳群でも石室の長さが短くなり7世紀になると幅が1m以下になってきて細長い石室となっている。本石室の場合、給人原古墳群の石室に比べ長さはやや短いものの幅は広くコ字形プランを呈するものである。これが地域差か被葬者間の差か、何に起因するかは明らかでないが、今後小地域・古墳単位で資料を集めしていく中でこうした無袖式石室も時期差・地域差及び共通性を明らかにすることができるのではなかろうか。

#### 注

- (1) 例えば、安芸郡海田町歎觀音免第2号古墳、広島市安佐北区可部町青第3号古墳同上ヶ原C~10号古墳・同上ヶ原A~2号古墳、同原迫第10号古墳、同給人原第1~3・5・6・8~11号古墳、広島市安芸区船越町新宮古墳など。
- (2) 広島県立可部高等学校史学研究部『広島市可部古墳群 紹人原第9号・第11号古墳発掘調査報告』1974年
- (3) 久米開発事業に伴う文化財調査委員会「猿山遺跡 II」「久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(2) 1980年

# 図 版



a 叠谷遺跡遠景（西より）



b 同 上（東より）



a 畠谷遺跡SB 1 検出状態（西より）



b 畠谷遺跡SB 1 土器出土状態



a 畠谷遺跡SB 1 完掘後（東より）



b 畠谷遺跡SB 2 完掘後（南より）



a 豊谷遺跡SB 3 完掘後（東より）



b 同 上（北より）



a 豊谷遺跡SB4完掘後(東より)



b 同 上(南より)



a 畠谷遺跡 S P38検出状態



b 畠谷遺跡 S X16完掘後（東より）



a 畠谷遺跡SK19（南より）



b 畠谷遺跡SK21（北より）



a 豊谷遺跡SB 8 検出状態（東より）



b 豊谷遺跡SB 5・6（東より）



a 豊谷遺跡SB6（南より）



b 豊谷遺跡SK28（西より）



a 倉谷遺跡 S B 5 土器出土状態



b 倉谷遺跡 S K30 (南より)



a 壁谷遺跡SK33（西より）



b 同 上 完掘後（西より）



a 豊谷遺跡SB 9~13完掘後（西より）



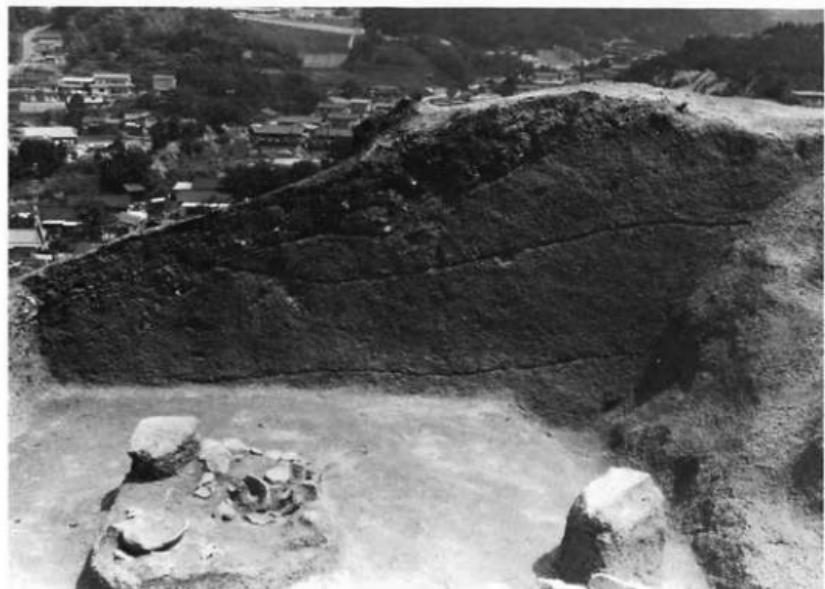
b 同 上（東より）



a 豊谷遺跡 S B 9～13（南より）



b 豊谷遺跡 S B 10（南より）



a 豊谷遺跡SB14土層（南より）



b 豊谷遺跡SB14完掘後（北より）

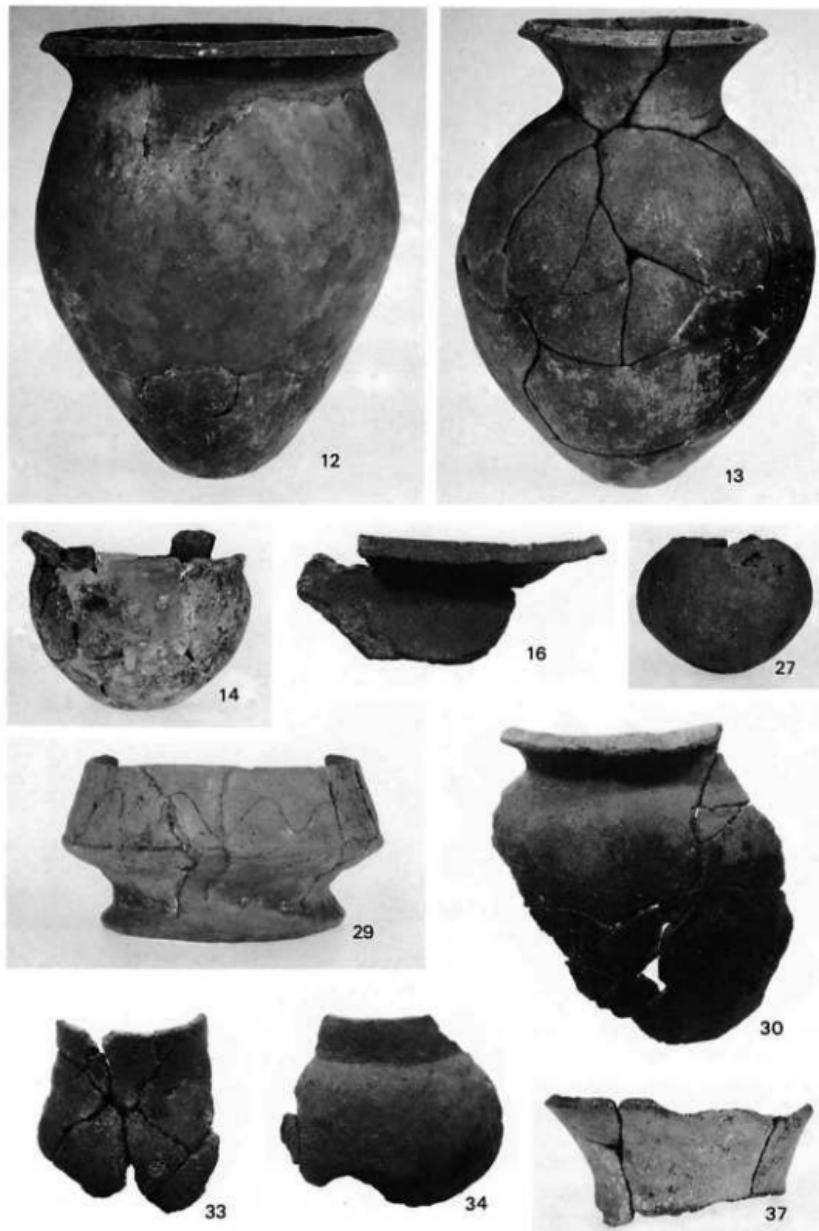


a 倉谷遺跡S B15完掘後（南より）

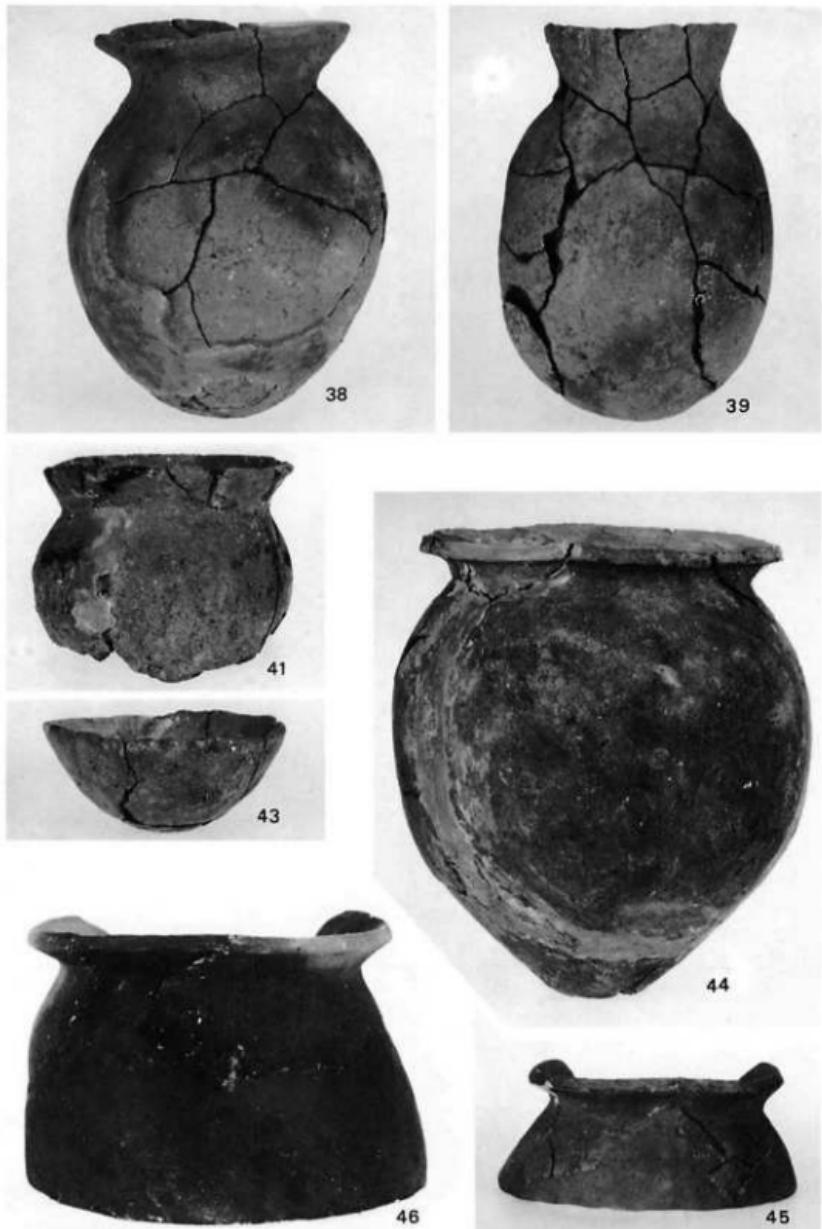


b 倉谷遺跡C地点貝塚（北より）

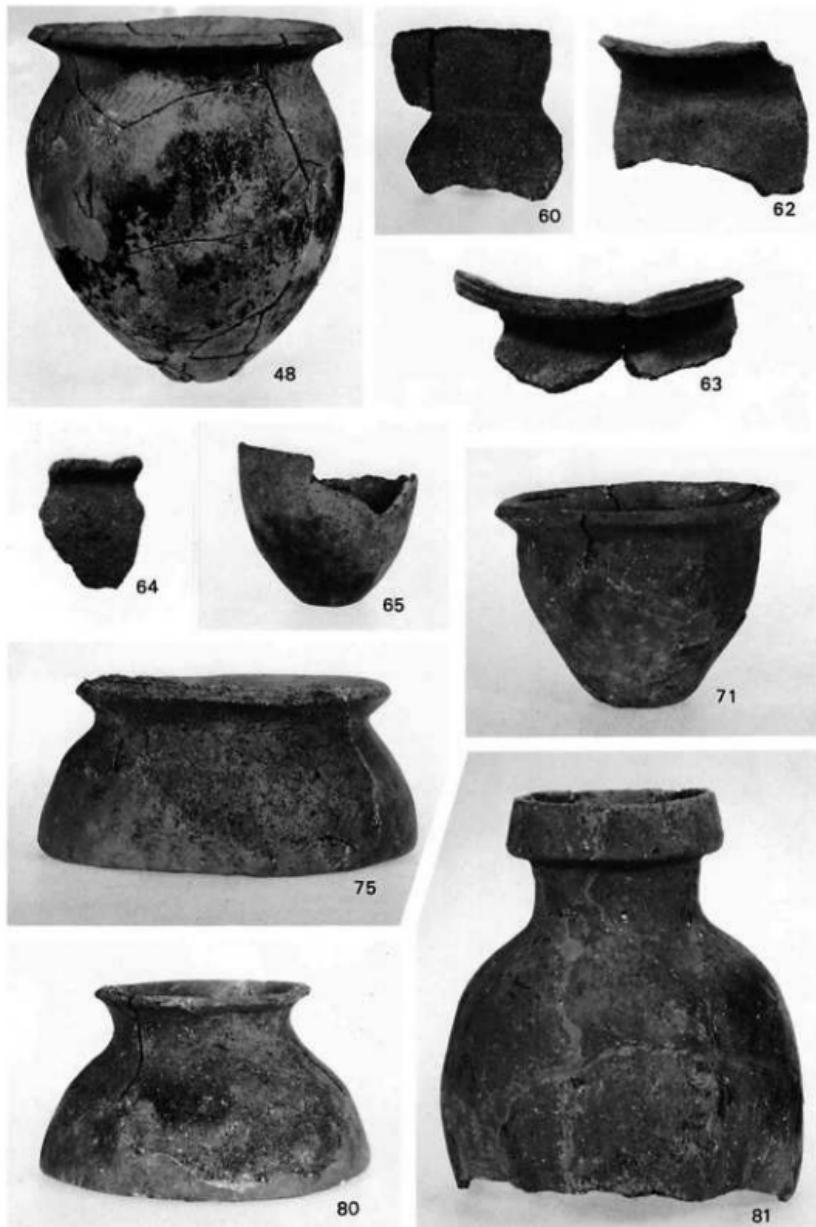




豊谷遺跡出土土器 (2)



疊谷遺跡出土土器 (3)



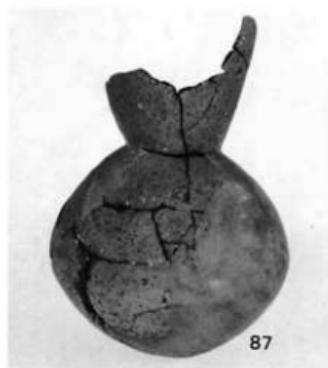
豊谷遺跡出土土器 (4)



86



89



87



93



94



96

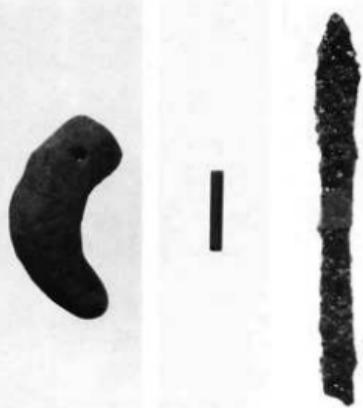
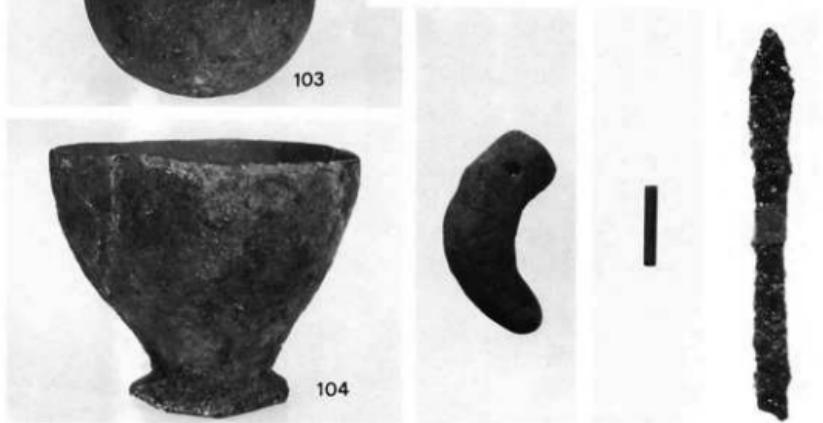
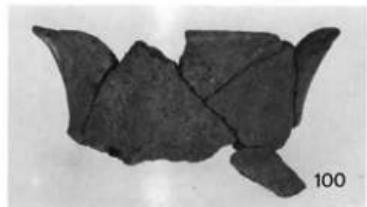
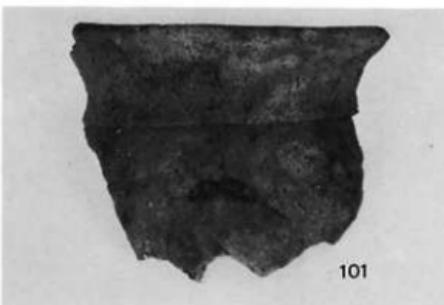


98



97

豊谷遺跡出土土器 (5)



豐谷遺跡出土土器、土製勾玉、管玉、鐵器



a 倉重古墳遠景（北西より）



b 倉重古墳横穴式石室全景（南東より）



a. 倉重古墳横穴式石室遺物出土状態（西より）



b. 倉重古墳横穴式石室全景（東より）



a 倉重古墳横穴式石室北側壁構築状態



b 倉重古墳横穴式石室敷石除去後



1



2



3



4



5



6



9



7



8



10



11

倉重古墳出土遺物

広島県文化財調査報告 第14集

1983年3月

編集・発行 広島県教育委員会

印 刷 山陽印刷株式会社